１．甘楽町人口ビジョンの位置づけ

国、県の人口ビジョンを勘案しつつ、甘楽町における人口の現状を分析し、人口に関する町民の認識を共有し、今後目指すべき将来の方向と人口の将来展望を掲示するものです。

この甘楽町人口ビジョンは、甘楽町版総合戦略において、まち・ひと・しごと創生の実現に向けて、効果的な施策を企画・展開する上で重要な基礎となります。

２．甘楽町人口ビジョンの対象期間

国においては、長期ビジョンの期間を平成 72 年（2060 年）としています。

しかしながら、甘楽町の規模において今後の人口の変化が将来に与える影響が早期に現れ、また大きいことが想定されるため、国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）の人口推計期間である平成 52 年（2040 年）とします。

３．国の長期ビジョン

国の人口は、2008 年の 1 億 2,808 万人をピークとして人口減少時代へ移り、今後一貫して人口が減少し続け、社人研によると、2060 年の総人口は 8,700 万人まで減少するとの見通しが出されています。この人口減少は、日本経済規模の縮小や国民生活水準の低下を招くと危惧されています。

人口減少に歯止めをかけるには、合計特殊出生率が人口置換水準（2.07）に回復することが必須となります。

合計特殊出生率は、2013 年が 1.41 であり、2020 年に 1.6 程度、2030 年に 1.8 程度、2040 年に 2.07 程度まで上昇すると、2060 年の人口は約 1 億 200 万人となり、長期的には 9000 万人程度で概ね安定的に推移するものと推計されています。

このような人口の推移と長期的な見通しにより、国では 2060 年に 1 億人程度の人口を維持することを目指しています。そして今後の基本戦略として、人口減少は国家の根本に関わる問題であるという認識を国民が共有し、以下の中長期的な目標を掲げ継続的に取り組むこととしています。

①若い世代の就労・結婚・子育て希望の実現

②東京圏への過度の人口集中の是正

③地域の特性に即した地域課題の解決

合計特殊出生率

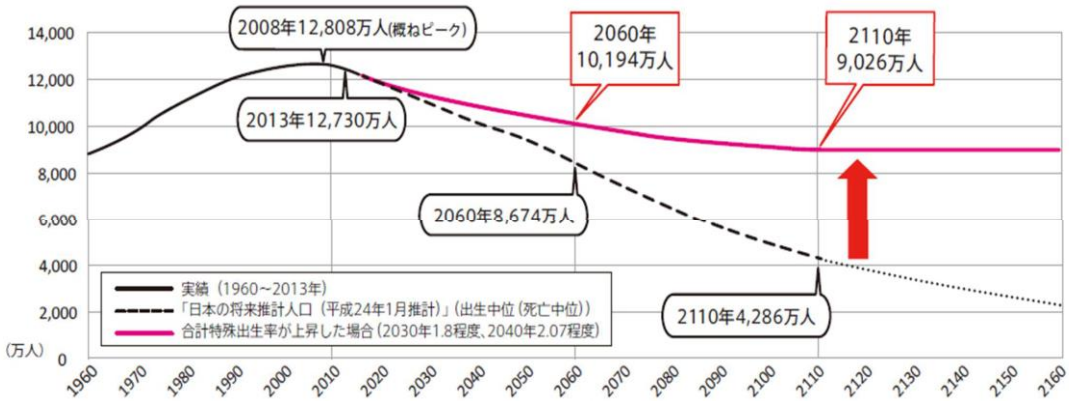
一人の女性が一生の間に産むであろう子どもの数を表し、15 歳～49 歳の女性の年齢ごとの出生率を合計した数値である。2.07 が人口維持の目安である。

【日本の人口推移と長期的な見通し】

○　国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 24 年 1 月推計）」（出生中位（死亡中位））によると、2060 年の総人口は約 8,700 万人まで減少すると見通されている。

○　仮に合計特殊出生率が 2030 年に 1.8 程度、2040 年に 2.07（2020 年には 1.6 程度）まで上昇すると、2060 年の人口は約 1 億 200 万人となり、長期的には 9,000 万人程度で概ね安定的に推移するものと推計される。

○　なお、仮に合計特殊出生率が 1.8 や 2.07 となる年次が 5 年ずつ遅くなると、将来の定常人口が概ね 300 万人程度少なくなると推計される。



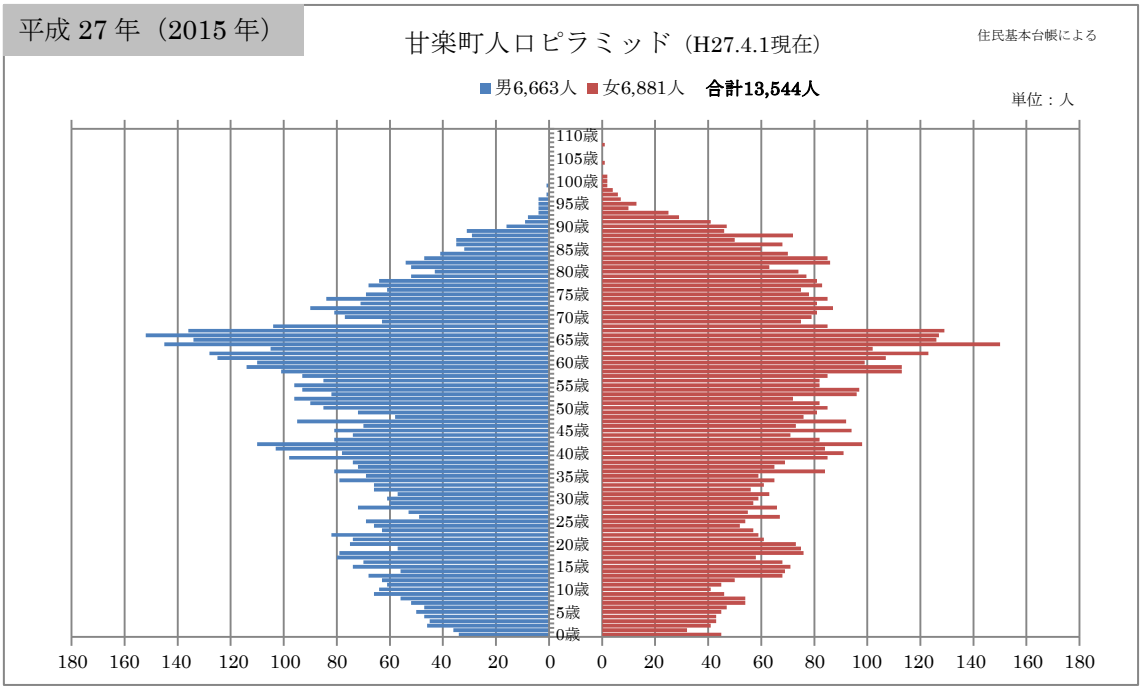
（注１）実績は、総務省統計局「国勢調査」等による（各年 10 月 1 日現在の人口）。国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 24 年 1 月推計）」出生中位（死亡中位）の仮定による。

（注２）「合計特殊出生率が上昇した場合」は、経済財政諮問会議「選択する未来」委員会における人口の将来推計を参考にしながら、合計特殊出生率が 2030 年に 1.8 程度、2040 年に 2.07 程度（2020 年には 1.6 程度）となった場合について、まち・ひと・しごと創生本部事務局において推計を行ったものである。

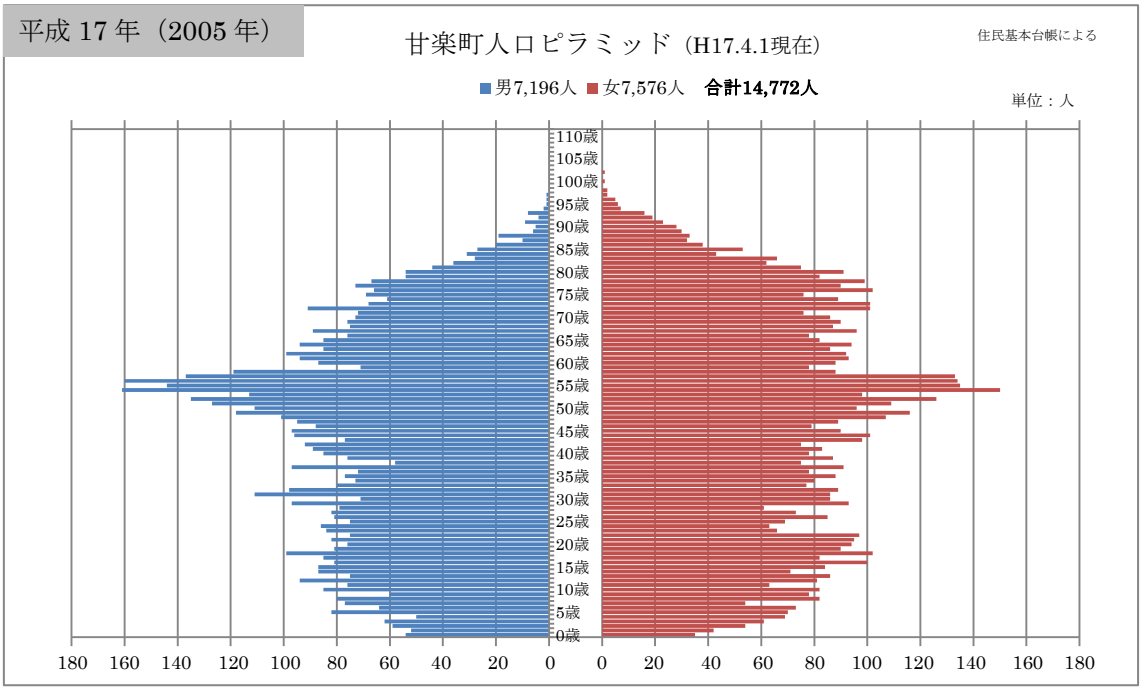
４．甘楽町の人口の現状

（１）年齢別人口

平成 27 年（2015 年）



平成 17 年（2005 年）

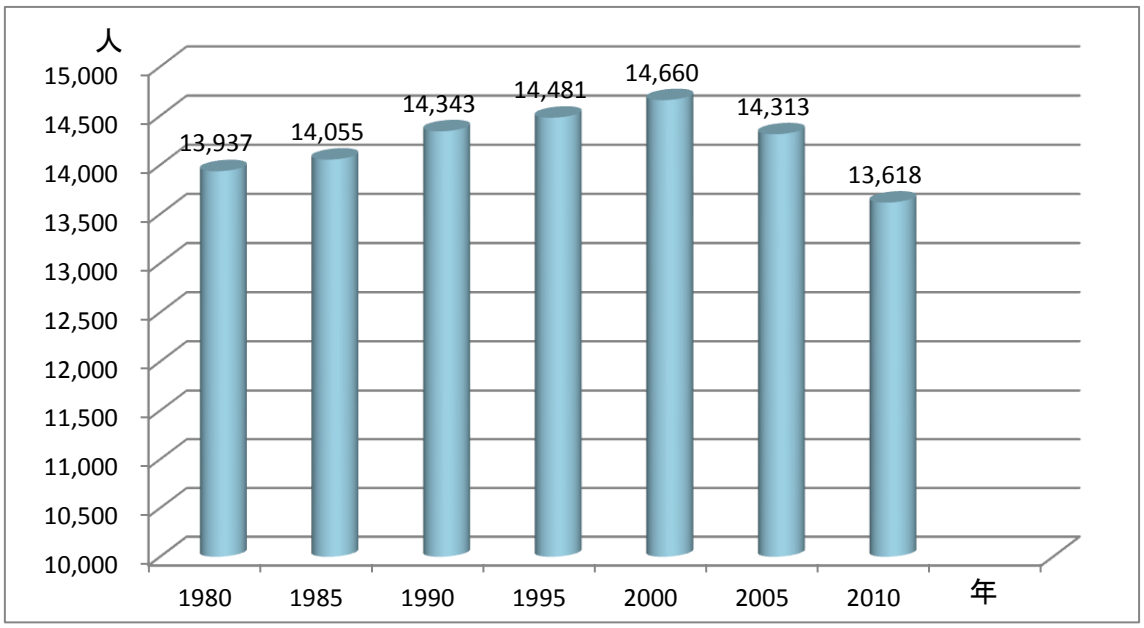


甘楽町の平成２７年（２０１５年）の人口ピラミッドは、つぼ型で６５歳前後の団塊の世代が大きな厚みを見せ、そのジュニア世代も厚みを見せています。

２５歳前後で大きなくびれが表れ、底部分は非常に小さくなっています。１０年前の人口ピラミッドと比べるとこの２点は顕著になっています。

（２）人口の推移

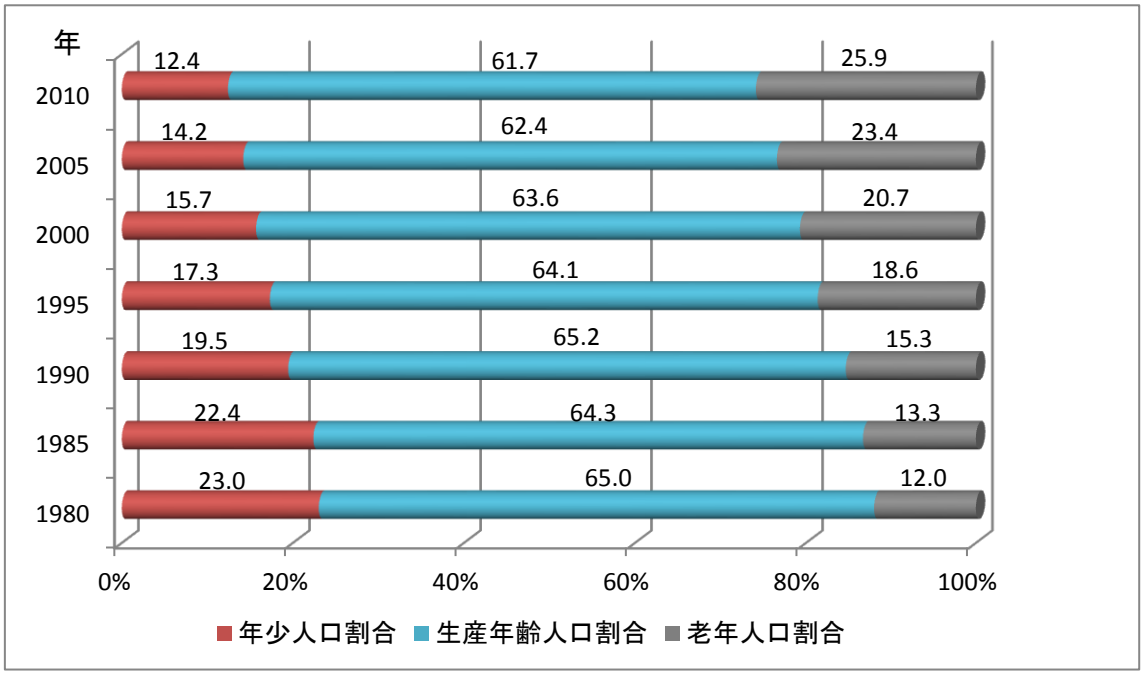
・総人口の推移



（国勢調査）

昭和３４年（１９５９年）の甘楽町発足当時の人口は１５，４２６人で、昭和４５年頃まで減少し、その後平成１１年（１９９９年）までは微増傾向でしたが、以降少子化などの影響により減少に転じています。

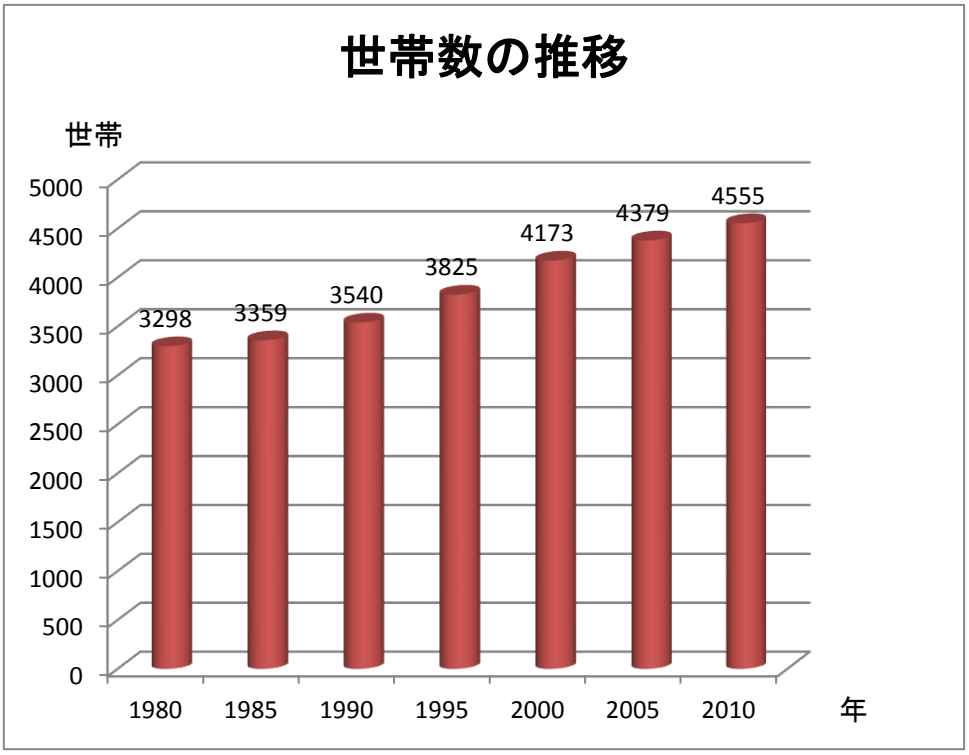
・年齢３区分別人口構成の推移

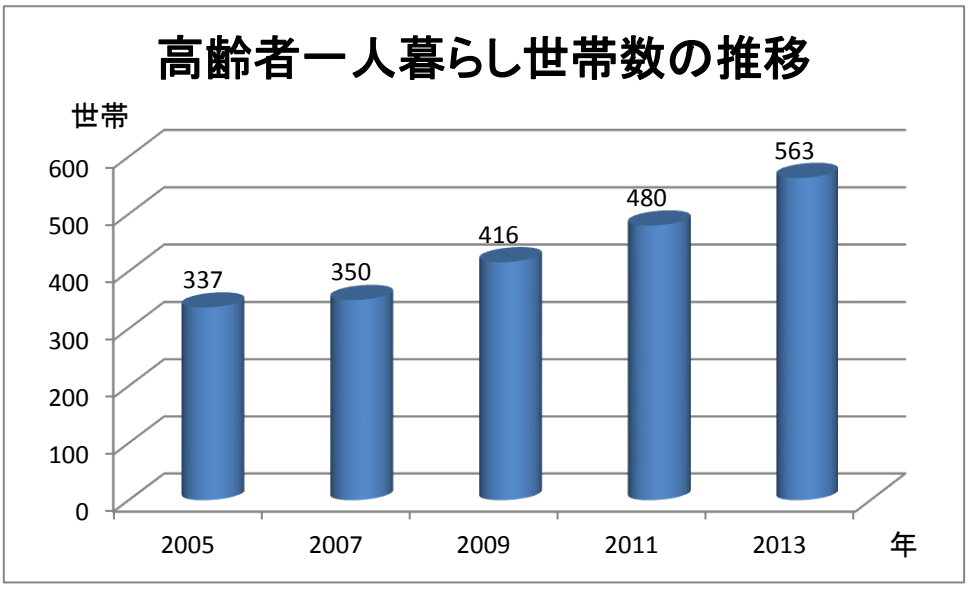


（国勢調査）

年齢３区分別人口構成の推移を見ると、年少人口の減少と老年人口の増加が顕著であり、少子高齢社会が到来しています。

（３）世帯数の推移

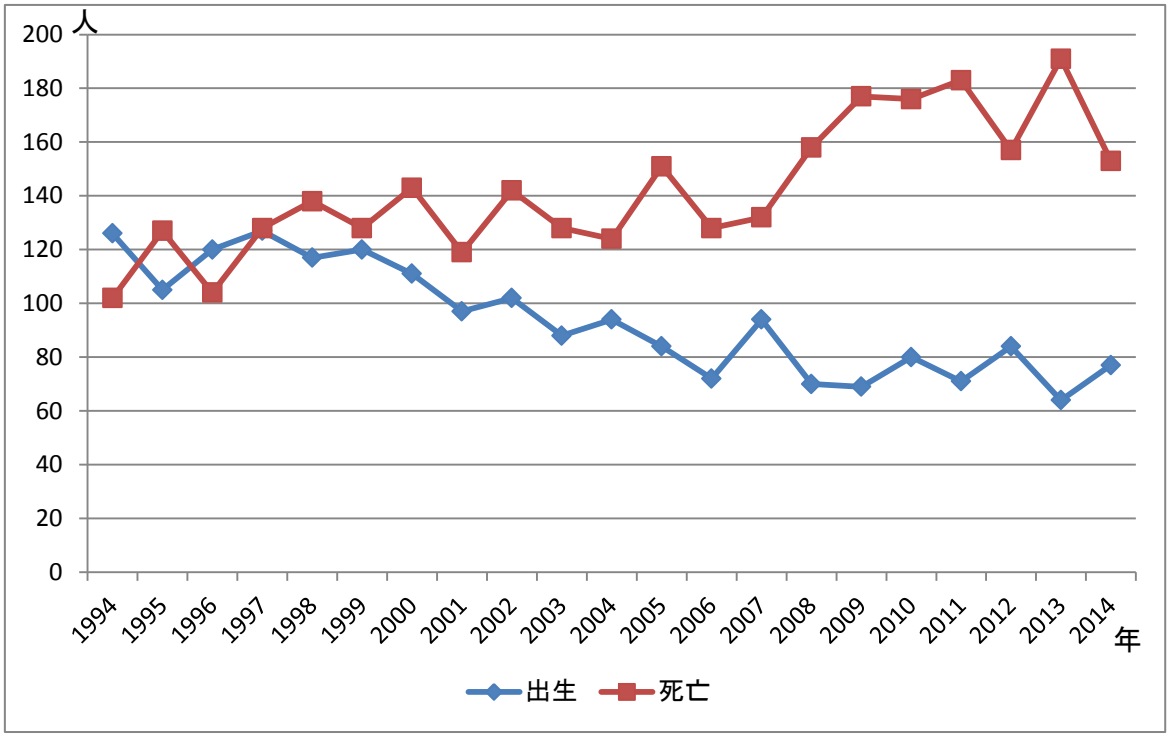




世帯数は、核家族化の進行、住宅団地の造成、アパートの増加等の要因により増加しています。また、高齢者のひとり暮らし世帯数は、高齢化の進行により増加が顕著になっています。

（４）人口動態の推移

・自然動態の推移



（住民基本台帳移動報告）

（単位：人）

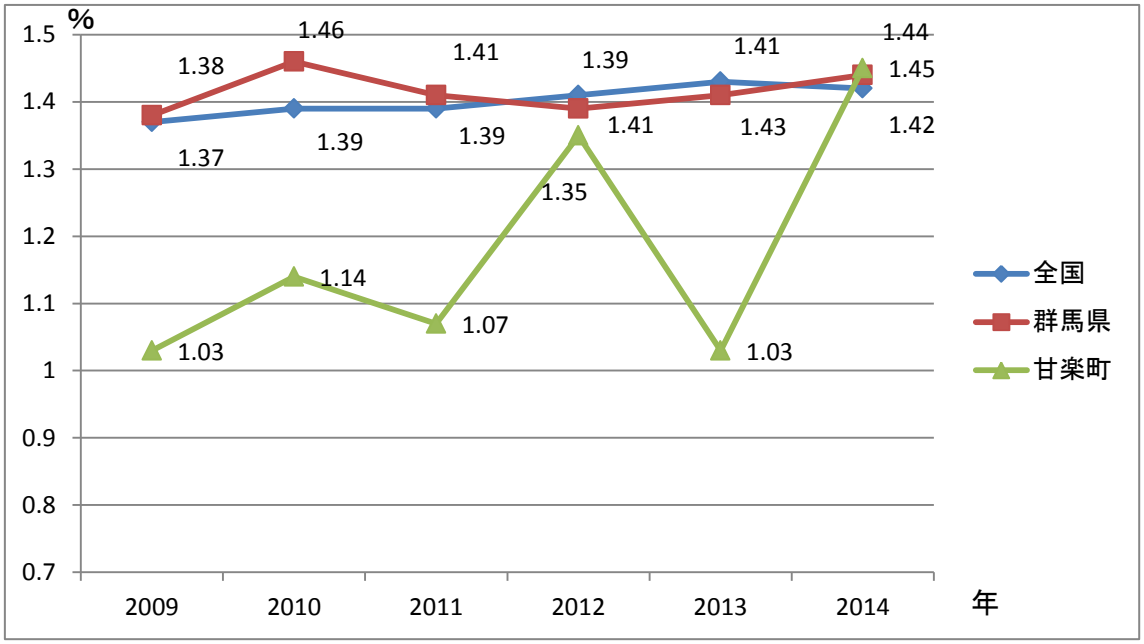
事由／年	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
出 生	126	105	120	127	117	120	111	97	102	88	94
死 亡	102	127	104	128	138	128	143	119	142	128	124
出生-死亡	24	-22	16	-1	-21	-8	-32	-22	-40	-40	-30

事由／年	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
出 生	84	72	94	70	69	80	71	84	64	77
死 亡	151	128	132	158	177	176	183	157	191	153
出生-死亡	-67	-56	-38	-88	-108	-96	-112	-73	-127	-76

平成１２年（２０００年）を境に死亡者数と出生者数の差は、年々広がっていく傾向にあり、老齢人口の増加も相まって自然増は困難な状況です。

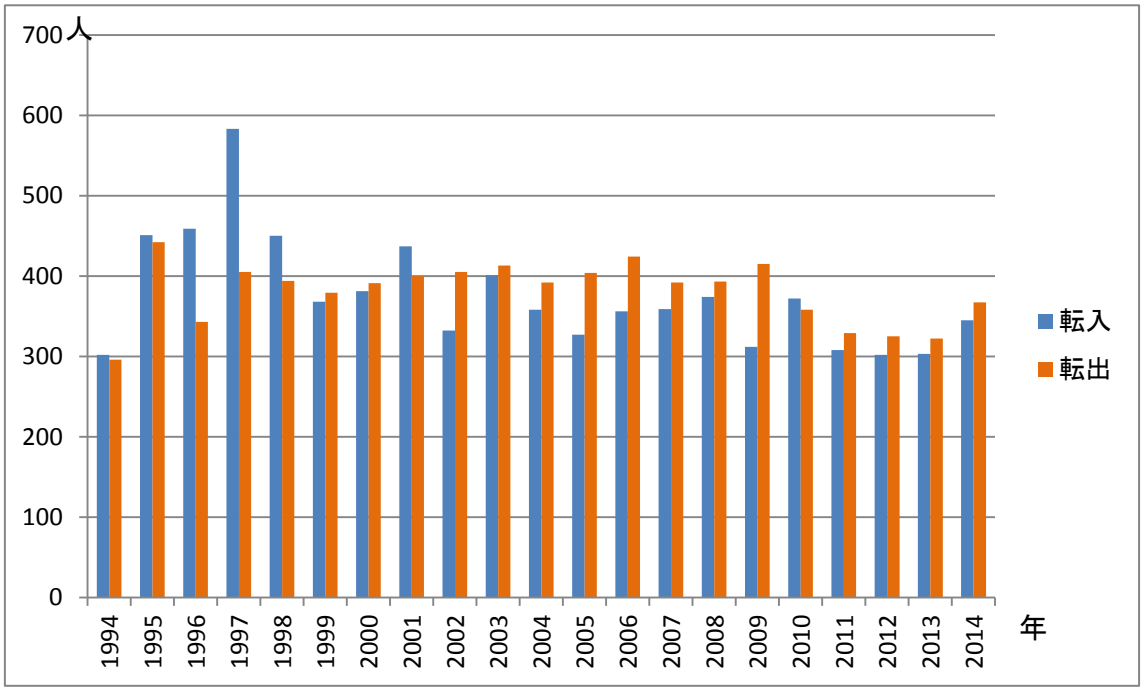
・合計特殊出生率の推移

（群馬県健康福祉課）



甘楽町の合計特殊出生率は、直近では県平均とほぼ同レベルではありますが、県平均を大きく下回って推移して来ました。この状況は、若い世代が町外転出し出産をしていたものと推測されます。

・社会動態の推移



（住民基本台帳移動報告）

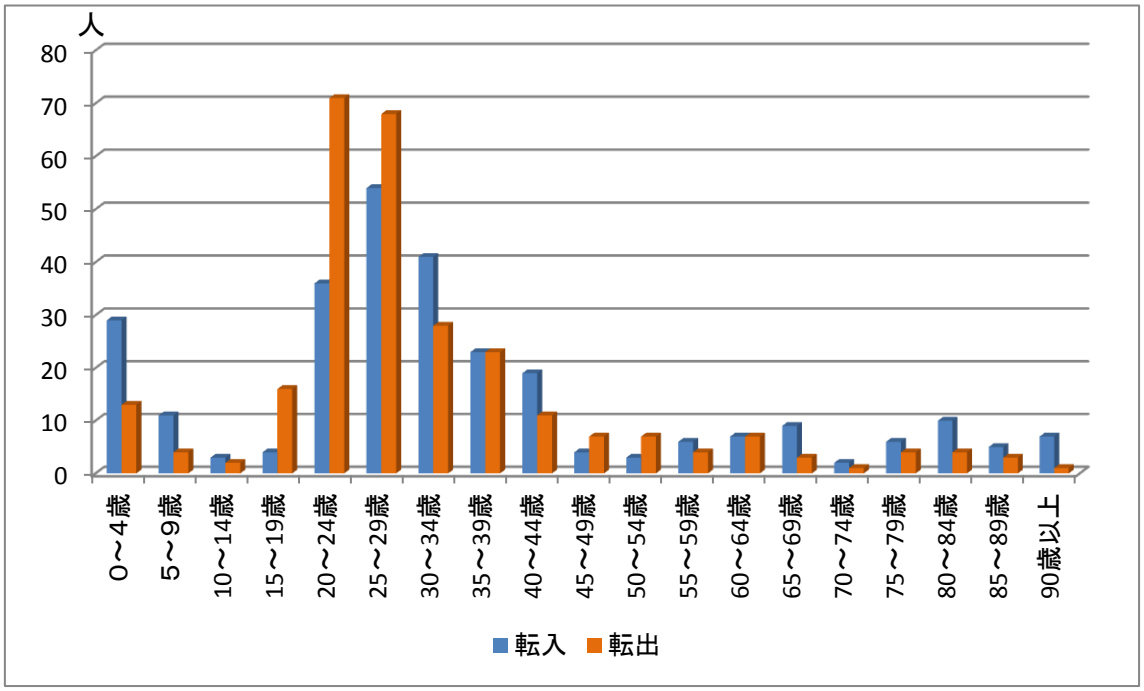
（単位：人）

事由／年	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
転　入	302	451	459	583	450	368	381	437	332	401	358
転　出	296	442	343	405	394	379	391	400	405	413	392
転入-転出	6	9	116	178	56	-11	-10	37	-73	-12	-34

事由／年	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
転　入	327	356	359	374	312	372	308	302	303	345
転　出	404	424	392	393	415	358	329	325	322	367
転入-転出	-77	-68	-33	-19	-103	14	-21	-23	-19	-22

総体的に転出が転入を上回り社会減の状況ではありますが、ここ数年は人口移動は総数では落ち着き、増減が拮抗しています。

・5 歳階級別転入転出の状況（2013 年）

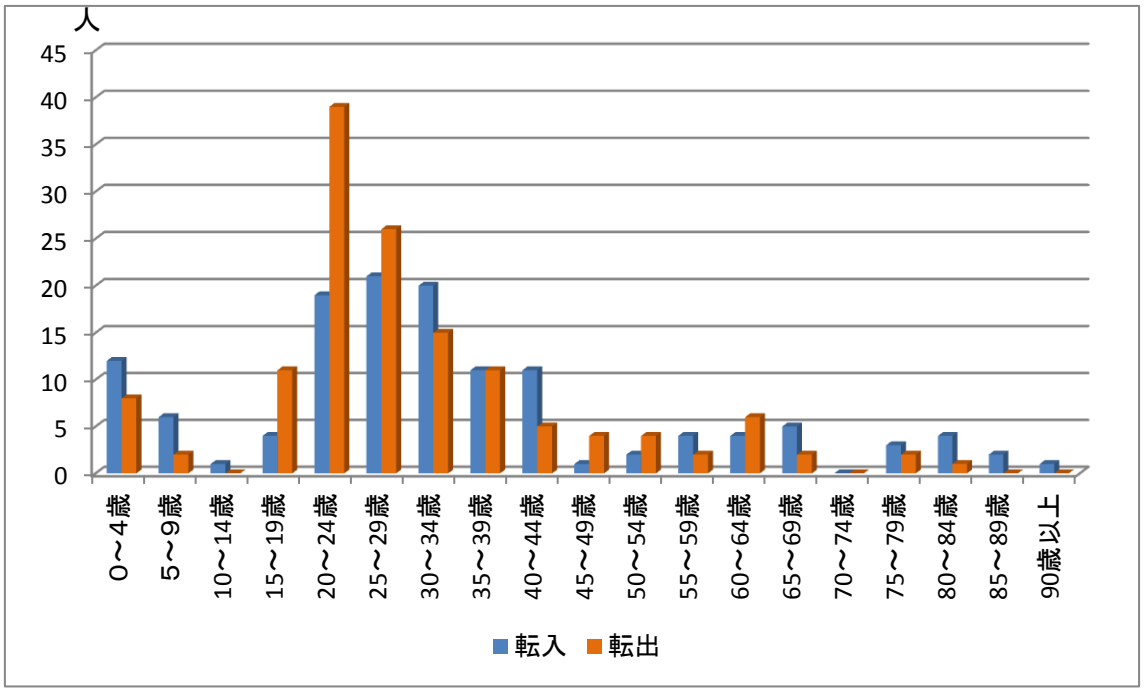


前述のとおり、ここ数年は人口移動は総数では落ち着き増減が拮抗していますが、年代別では、高校卒業から２０代後半までにおいて転出が転入を大きく上回っており、進学、就職、結婚を機に町外へ転出していることが伺えます。

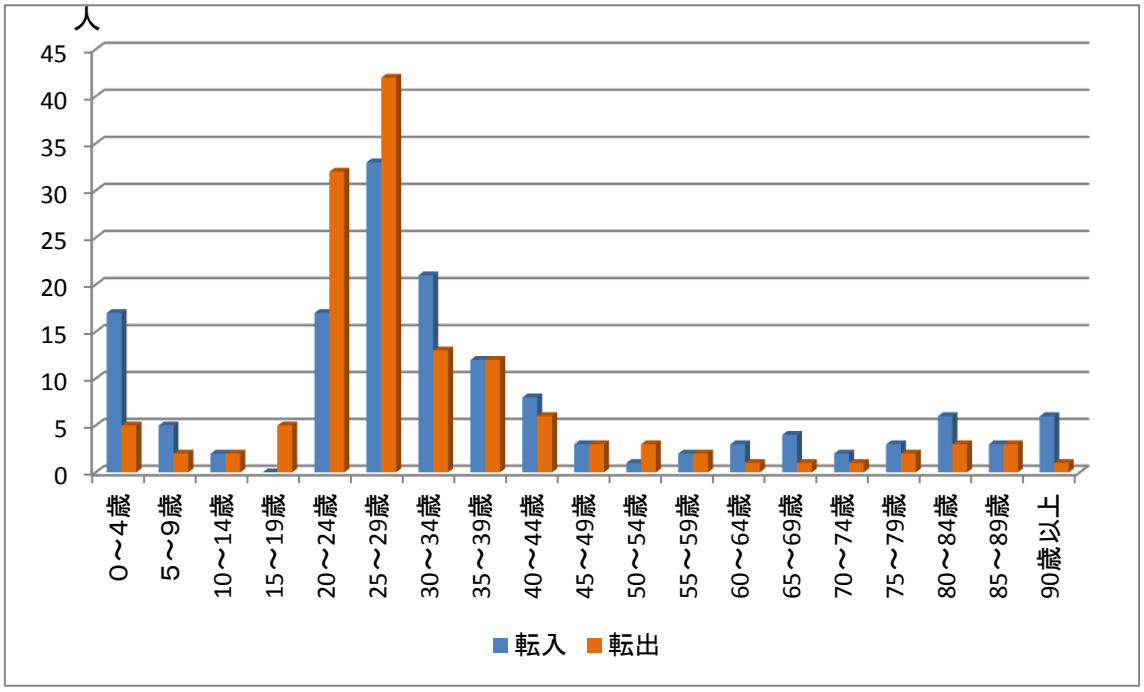
３０歳を境に転入が転出を上回りますが、子育て世代の甘楽町への定住が推測されます。年少世代の転入の多さもそれを裏付けているといえます。

こうした状況が、出生数の低さ、合計特殊出生率の低さを生じさせているともいえます。

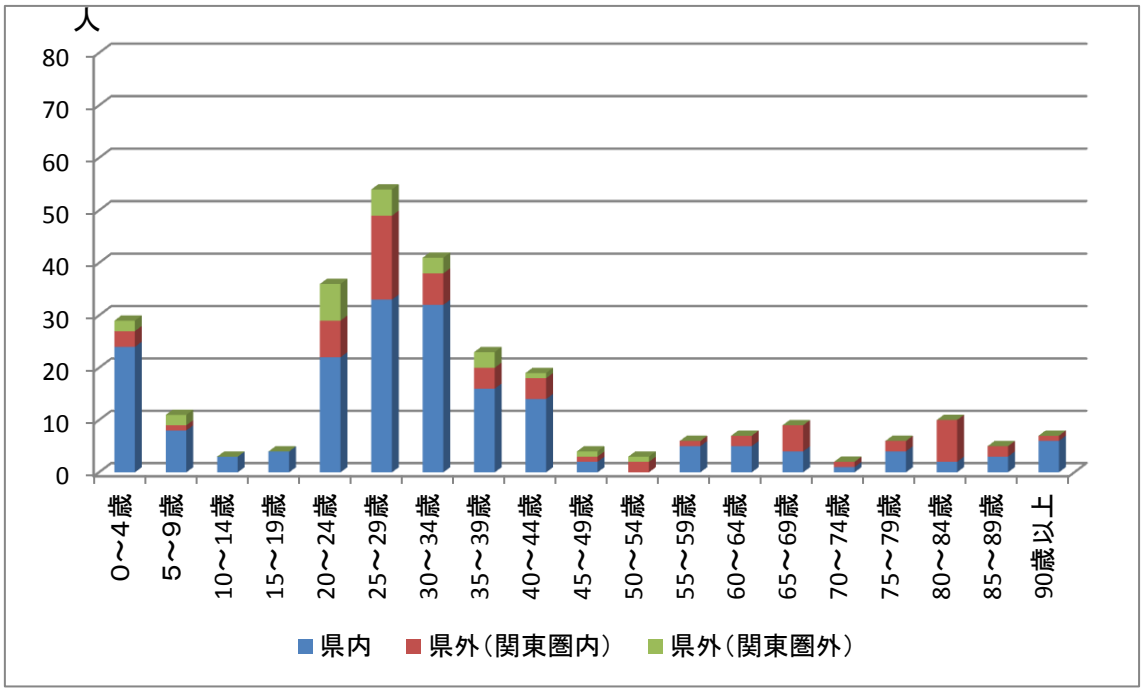
・5 歳階級別男性転入転出の状況（2013 年）



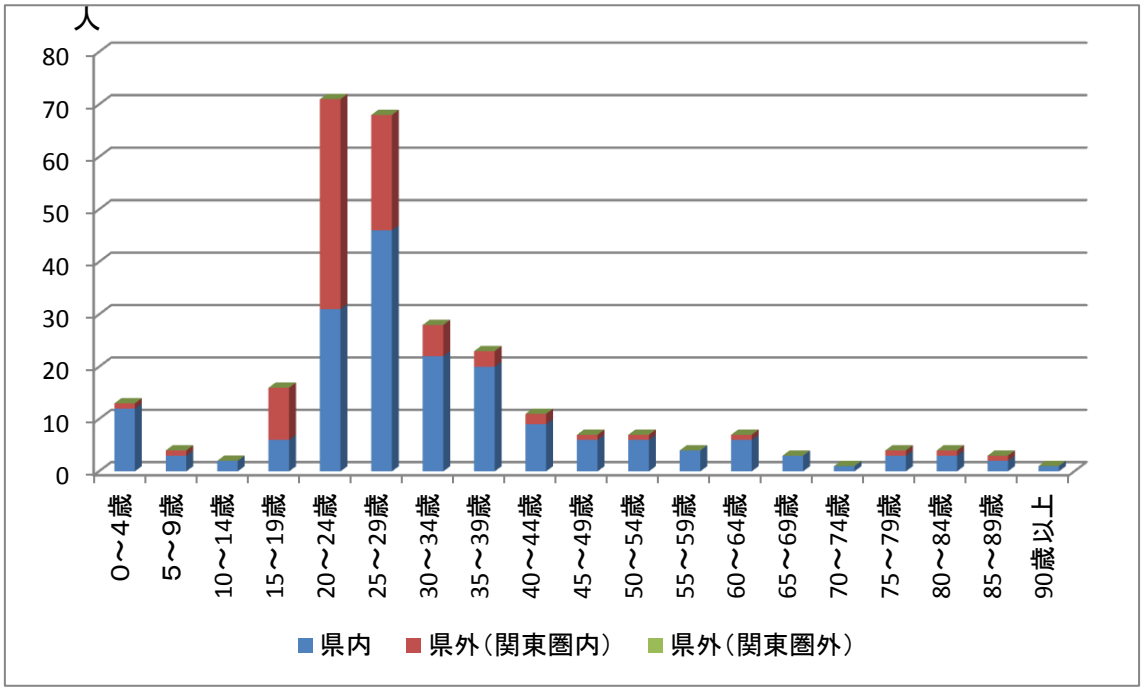
・5 歳階級別女性転入転出の状況（2013 年）



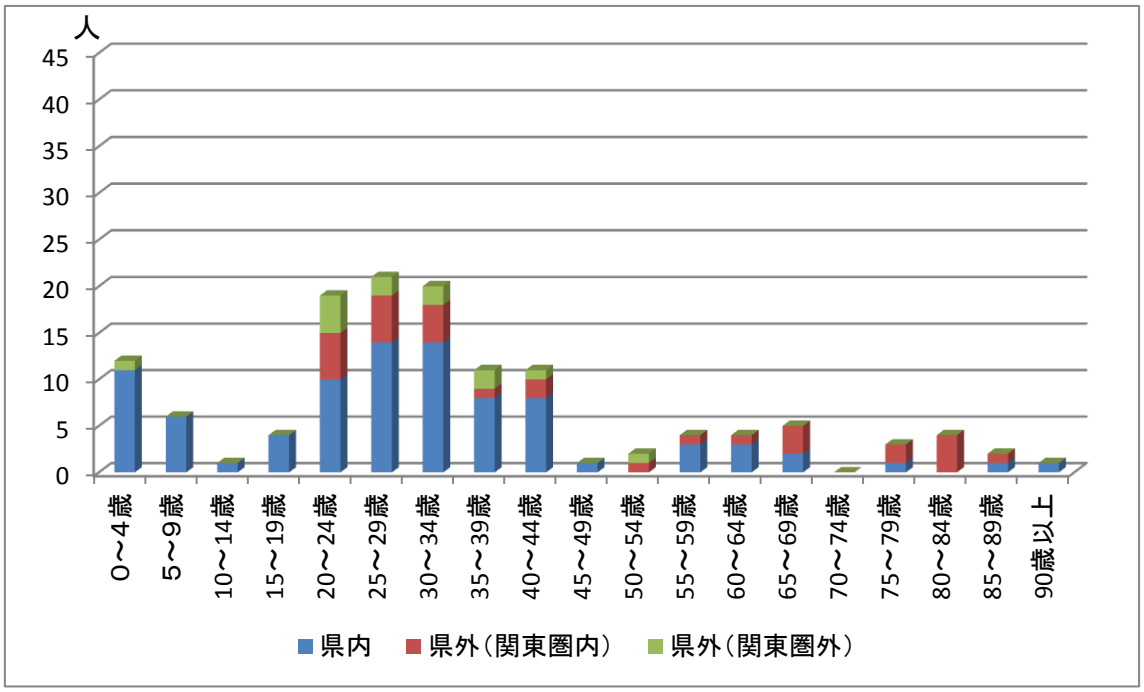
・5 歳階級別転入元の状況（2013 年）



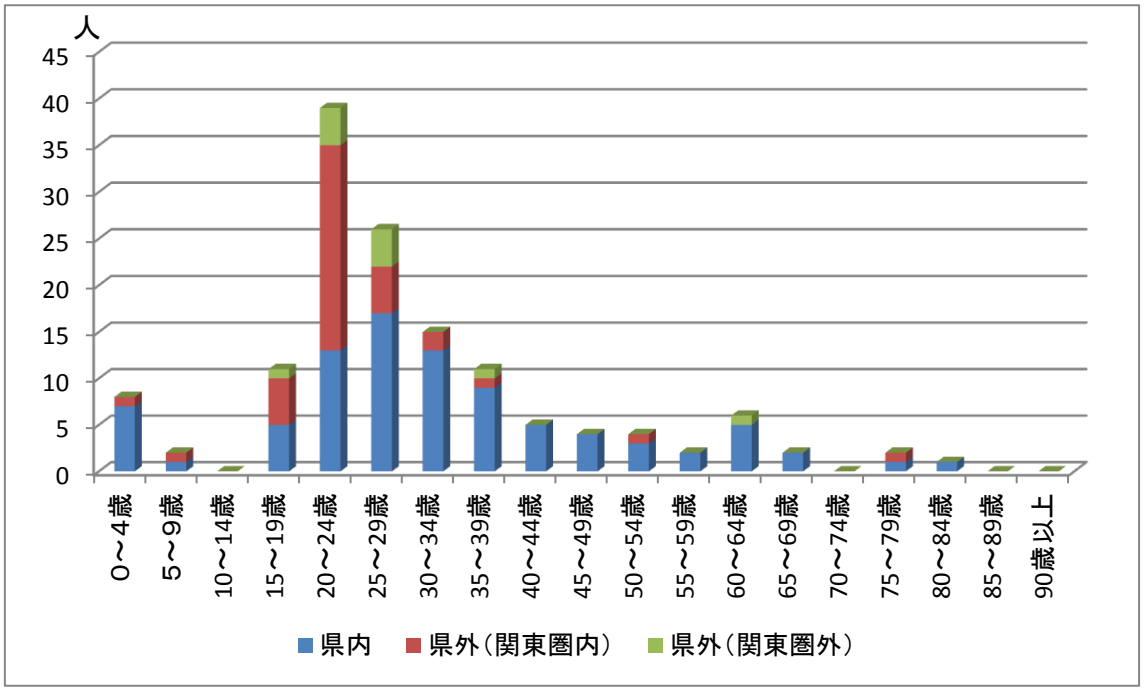
・5 歳階級別転出先の状況（2013 年）



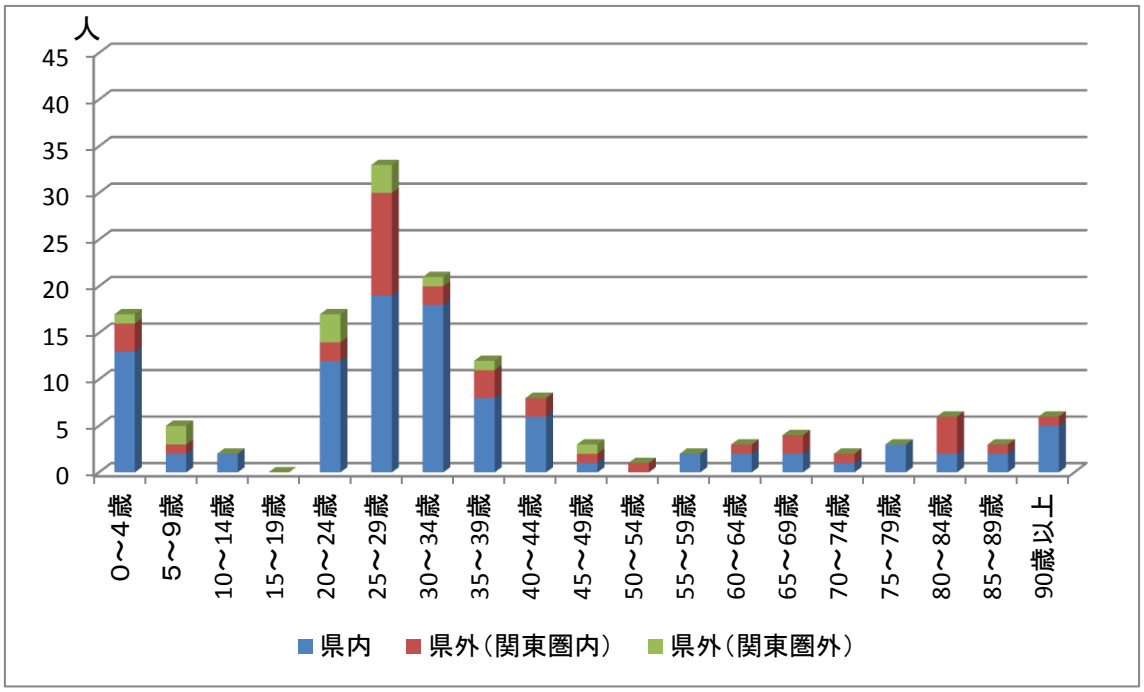
・5 歳階級別男性転入元の状況（2013 年）



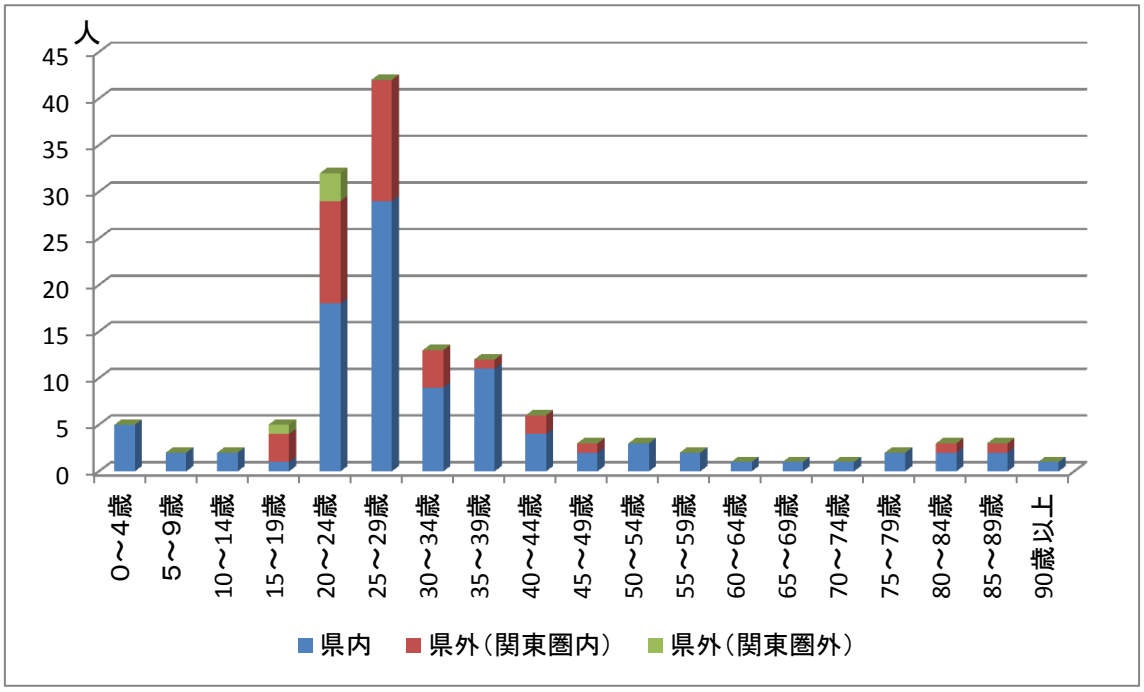
・5 歳階級別男性転出先の状況（2013 年）



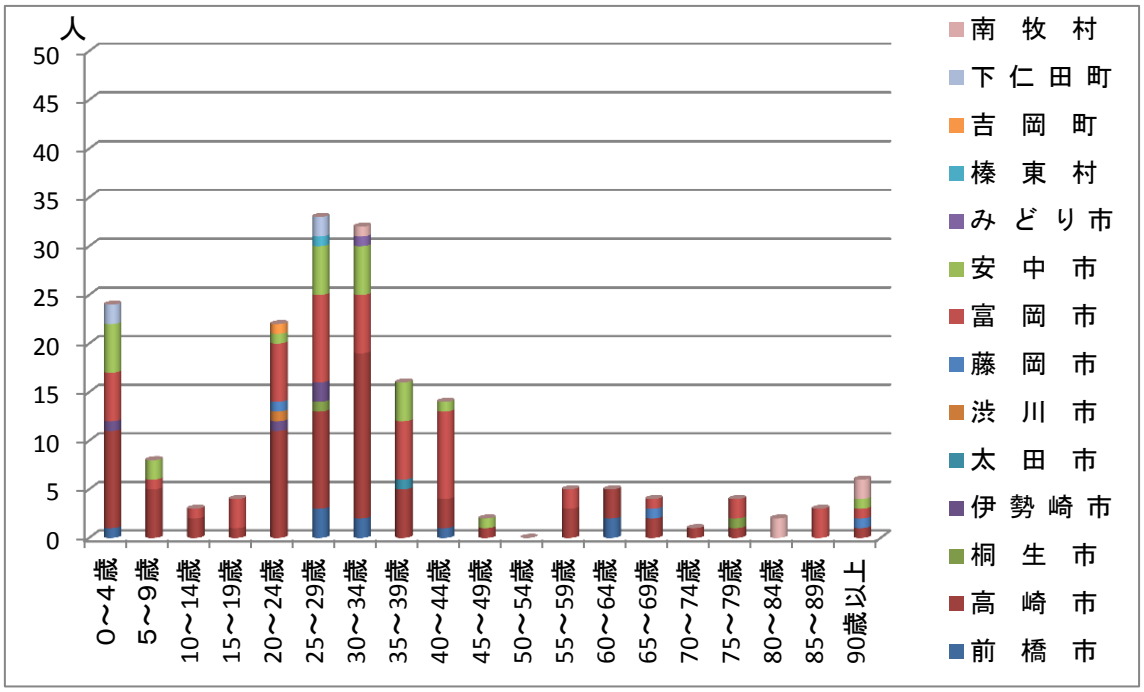
・5 歳階級別女性転入元の状況（2013 年）



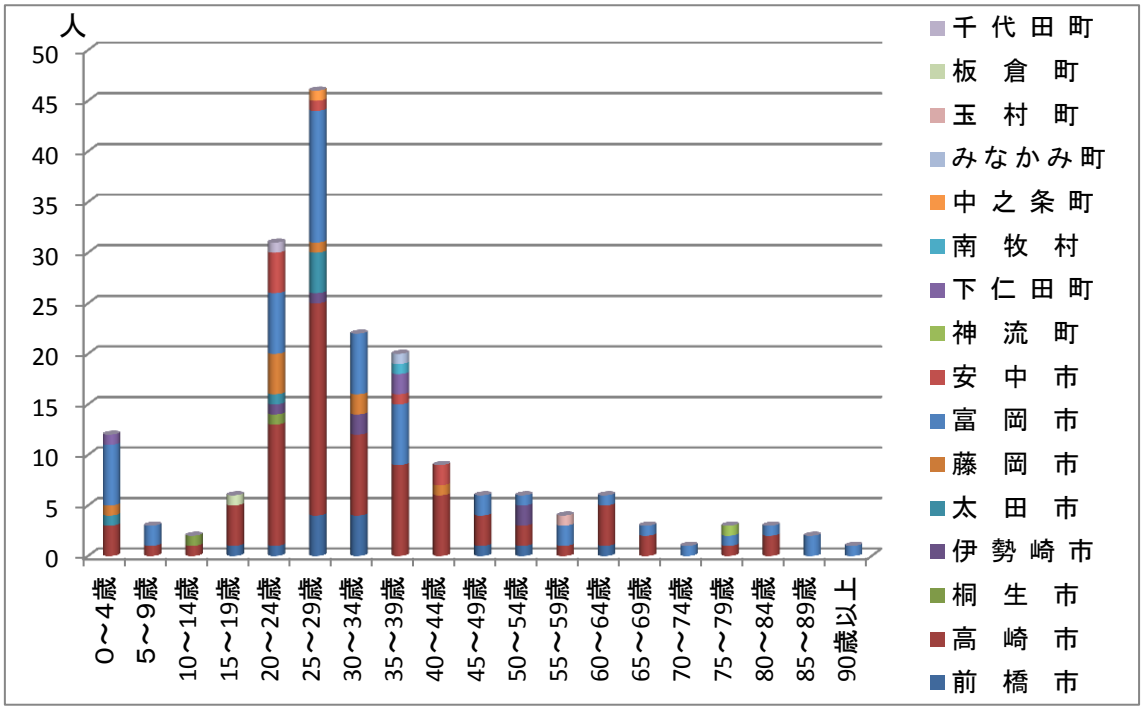
・5 歳階級別女性転出先の状況（2013 年）



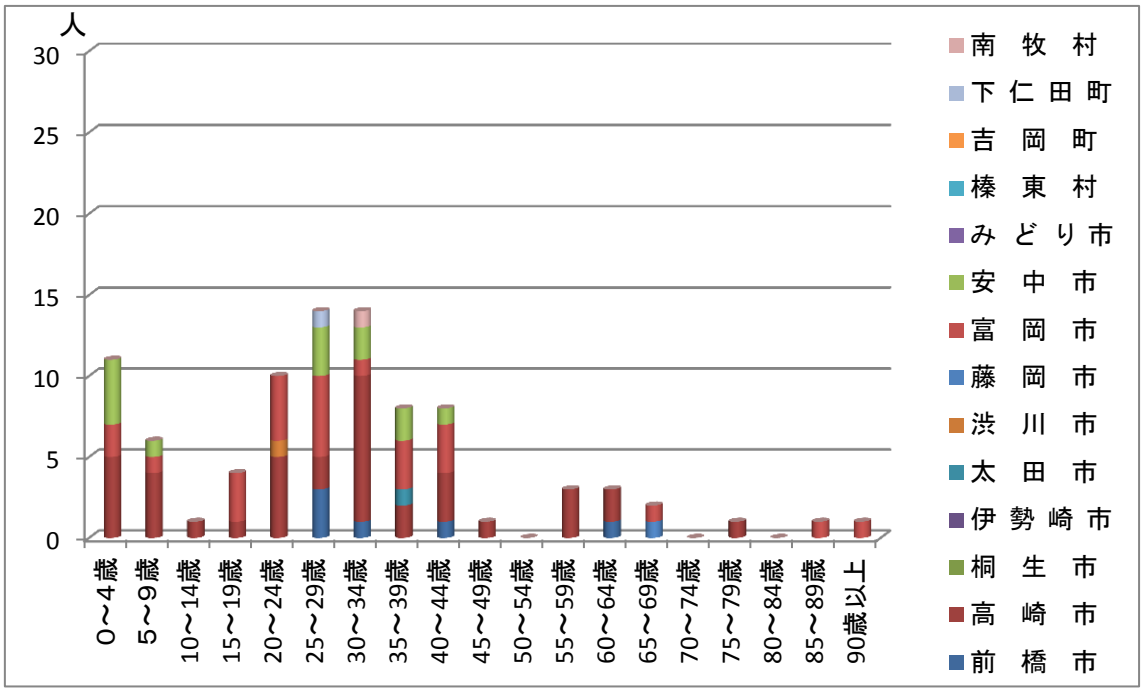
・5 歳階級別県内転入元の状況（2013 年）



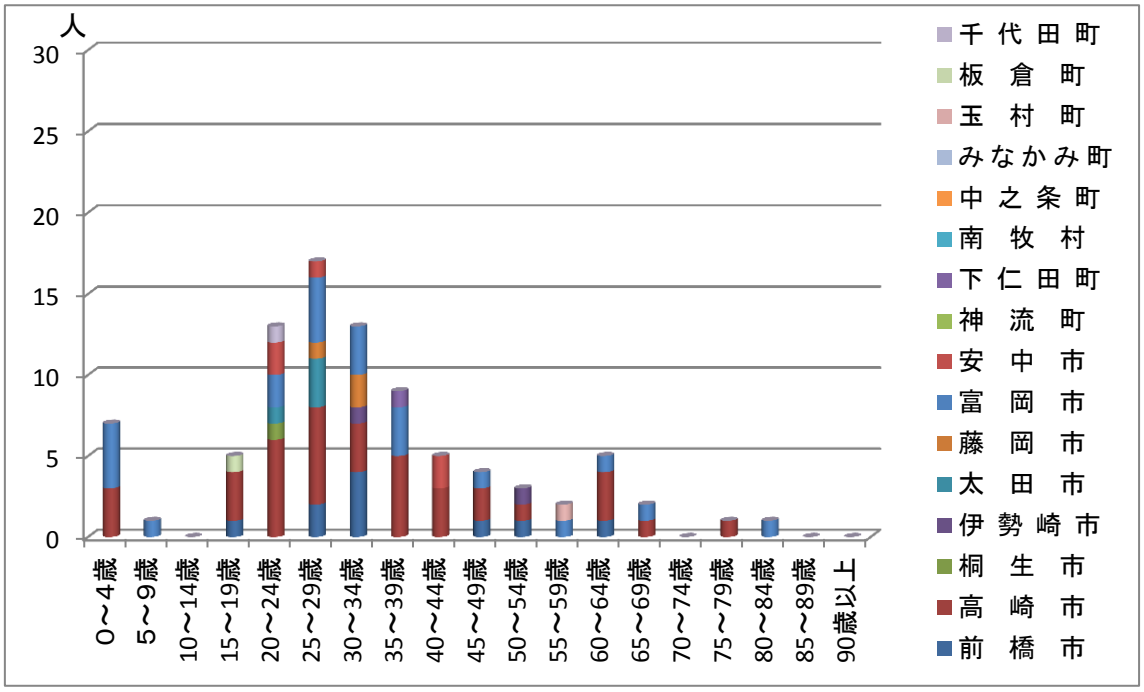
・5 歳階級別県内転出先の状況（2013 年）



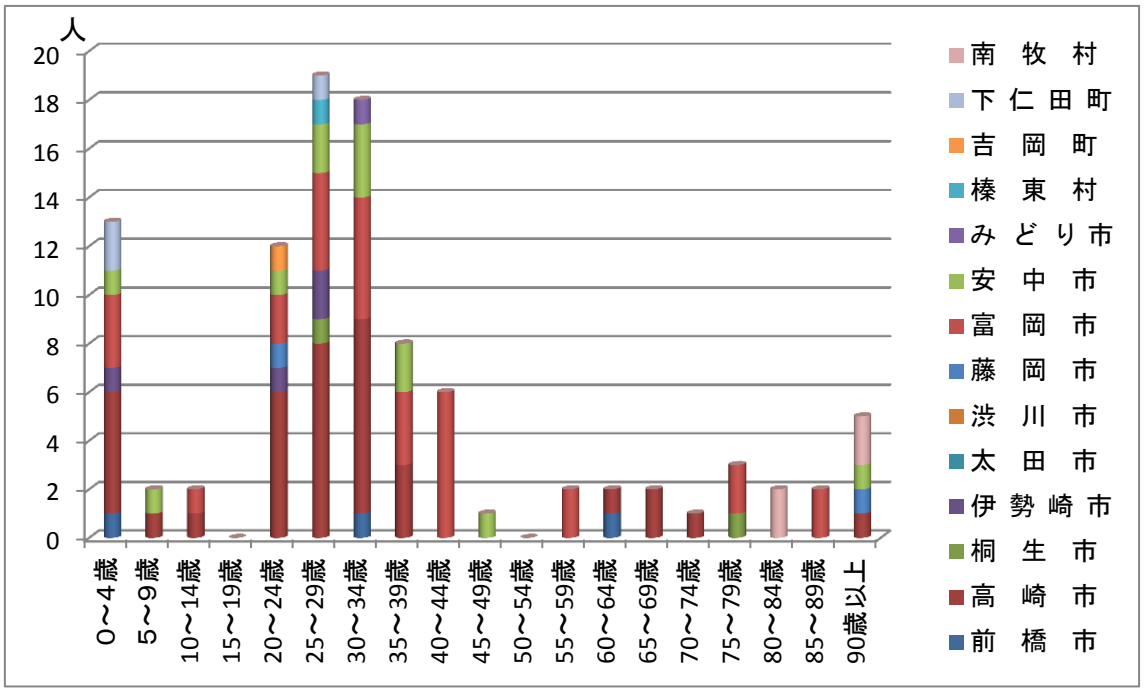
・5 歳階級別男性県内転入元の状況（2013 年）



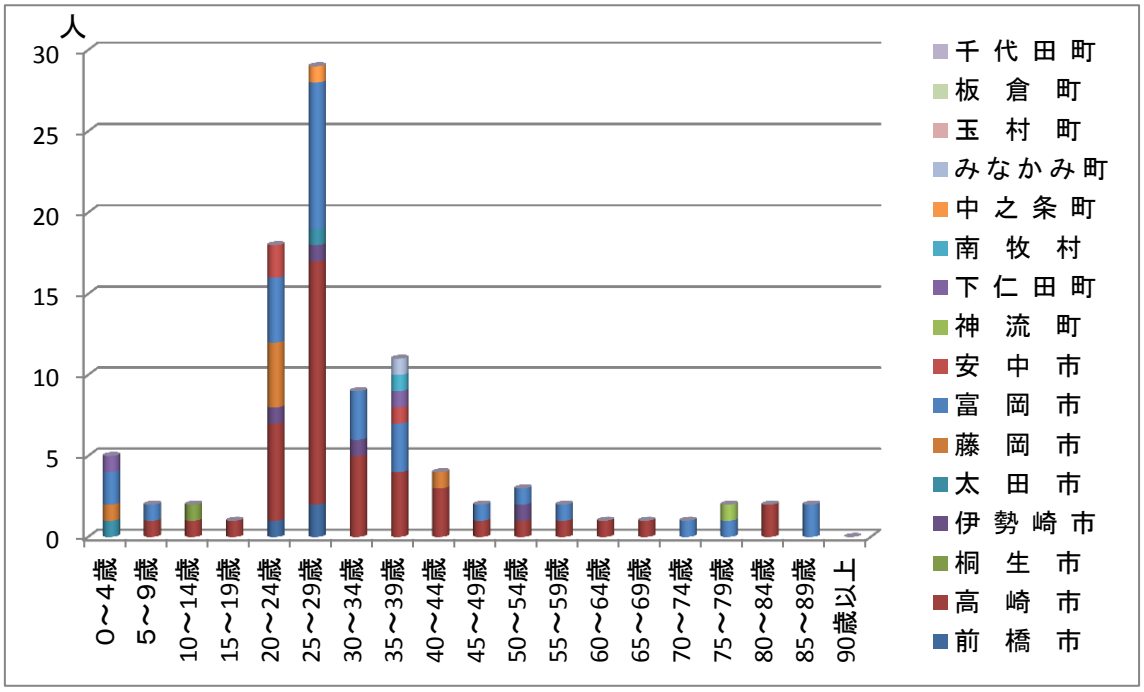
・5 歳階級別男性県内転出先の状況（2013 年）



・5 歳階級別女性県内転入元の状況（2013 年）



・5 歳階級別女性県内転出先の状況（2013 年）

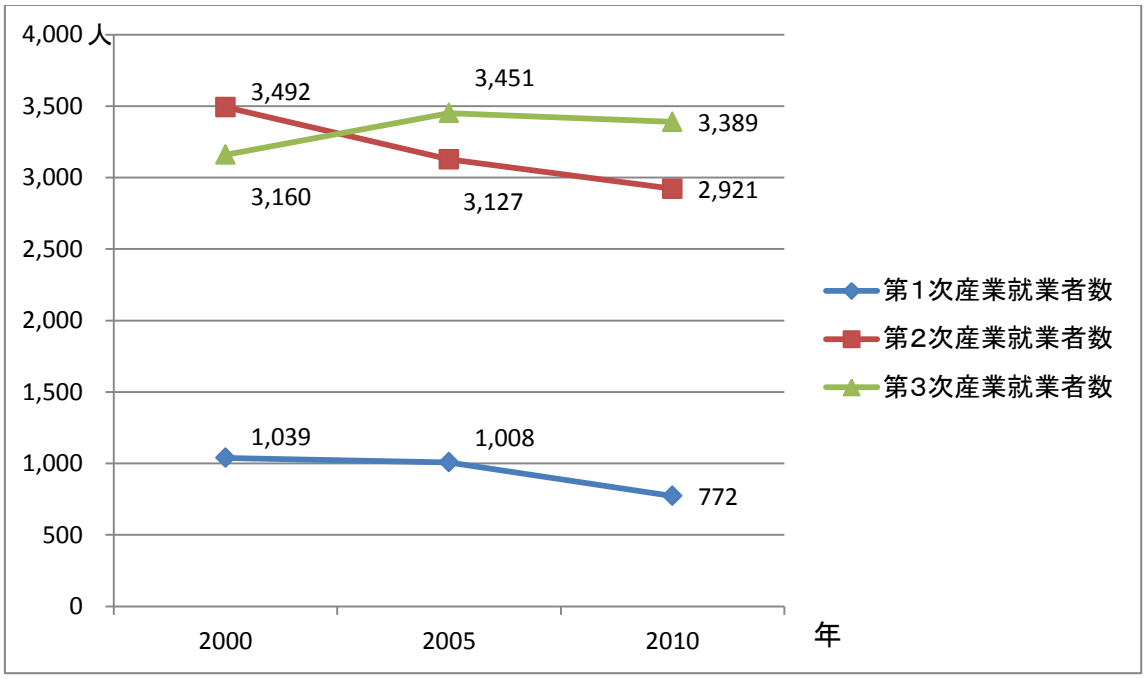


進学・就職世代においては、県外への転出入が見られますが、他の世代では県内への人口移動が主となっています。

県内移動では、生活圏である富岡市、高崎市が大半を占めていることがわかります。

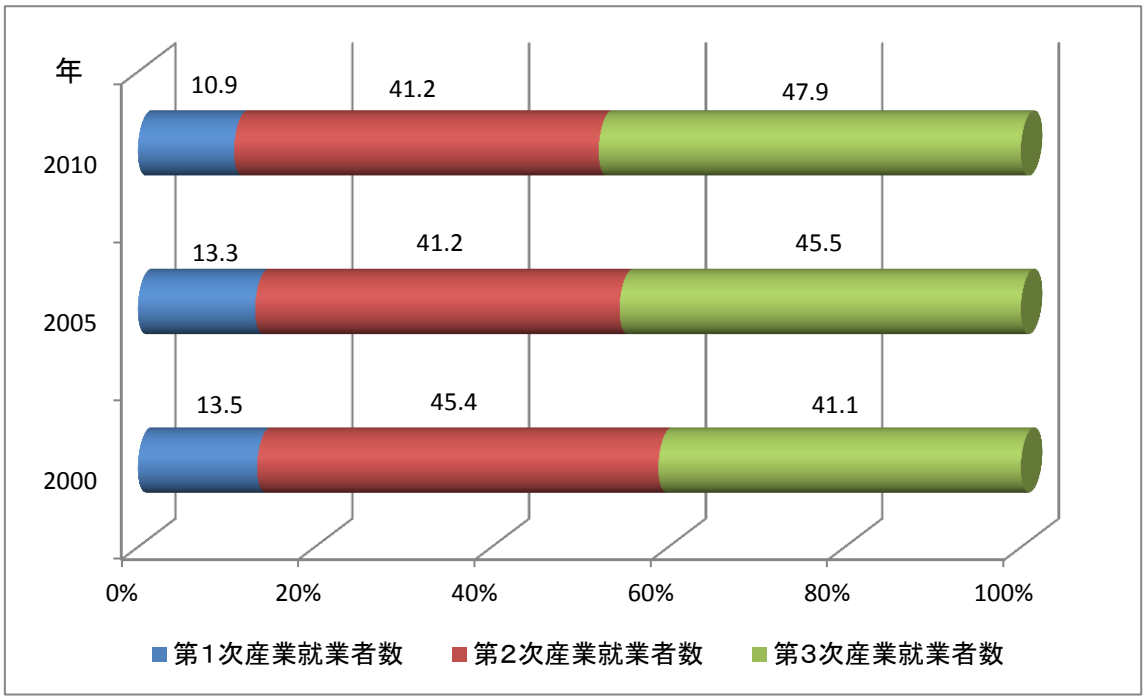
（５）産業別就業者

・産業別就業者の推移



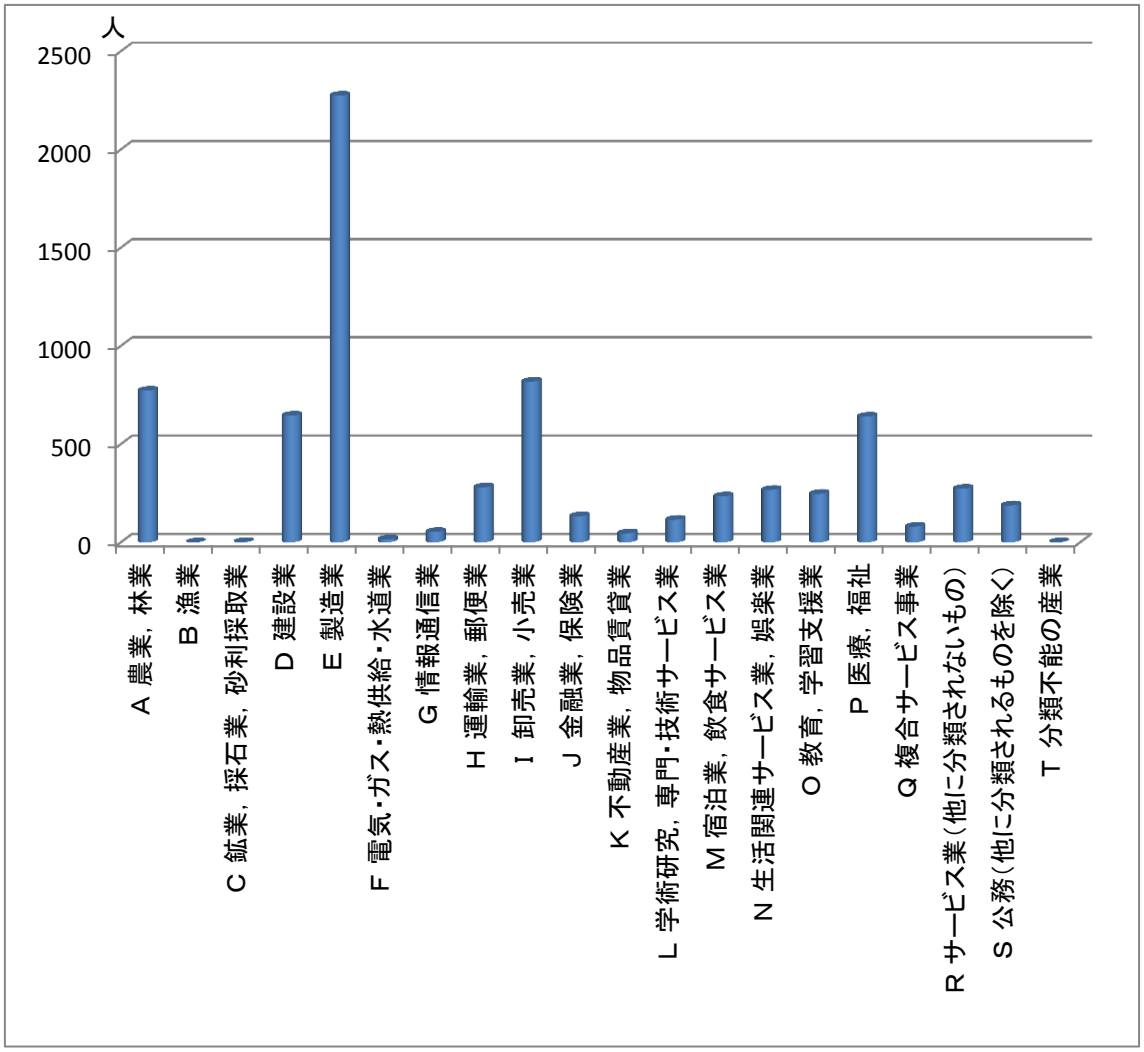
（国勢調査）

・産業別就業人口構成比の推移



（国勢調査）

・産業大分類別就業者数



（H22 国勢調査）

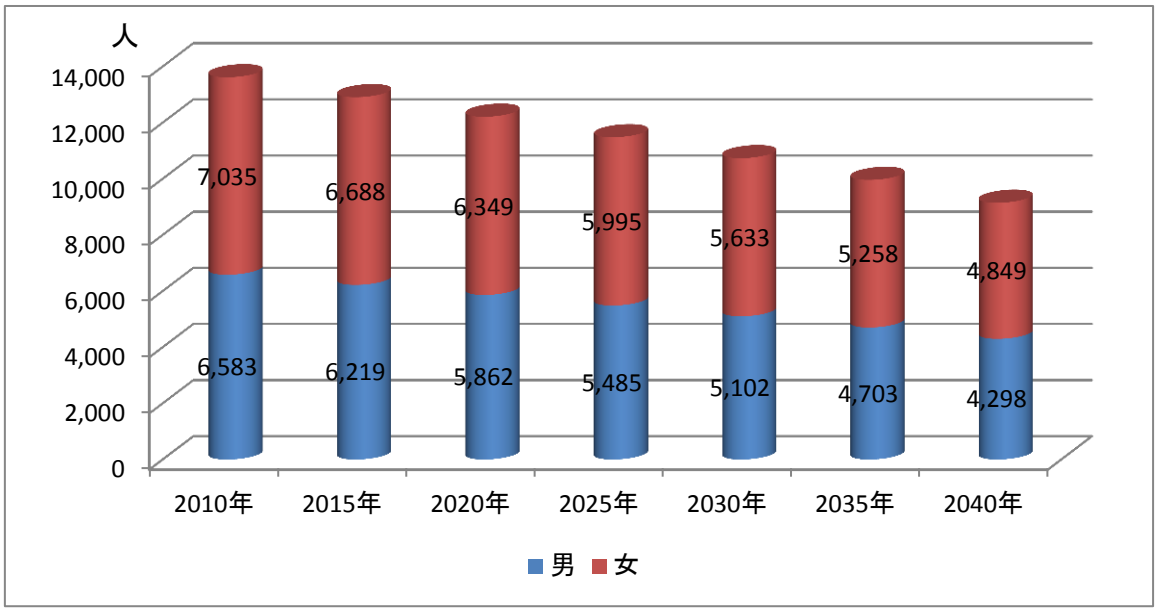
産業別就業者数は、第１次産業と第２次産業が減少傾向、第３次産業が横ばいとなっています。構成比では、第２次産業の割合が高くなっています。

産業大分類別人口では製造業従事者が極めて多く、製造業は総生産額においても約４５％（平成 24 年）を占めています。

５．甘楽町の将来人口の推計と分析

（１）将来人口分析

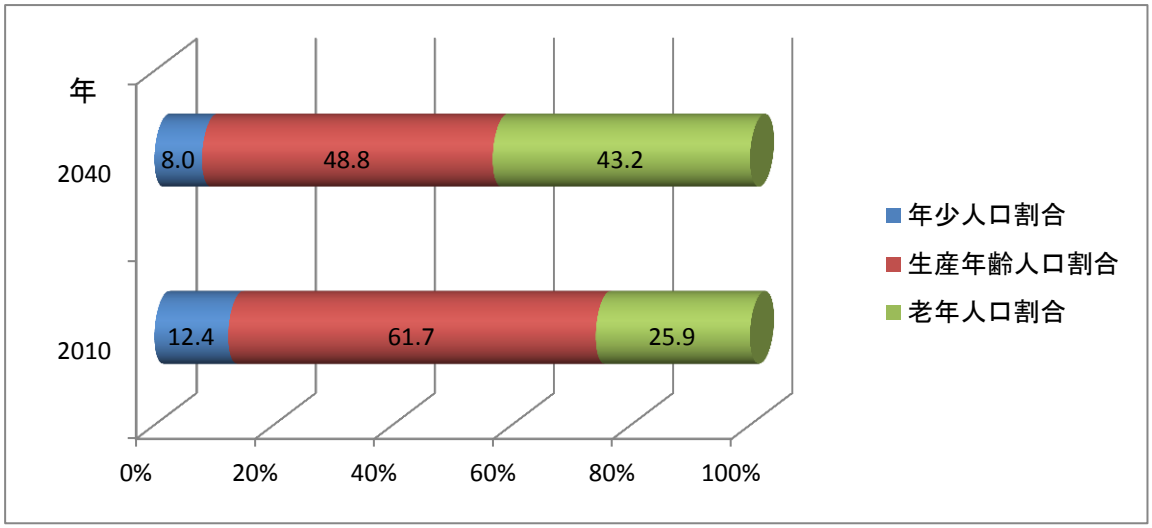
２０４０年までの自然増減、社会増減の傾向が現状のまま継続すると仮定した社人研推計に準拠すると毎年１５０人程度減少する推計となります。



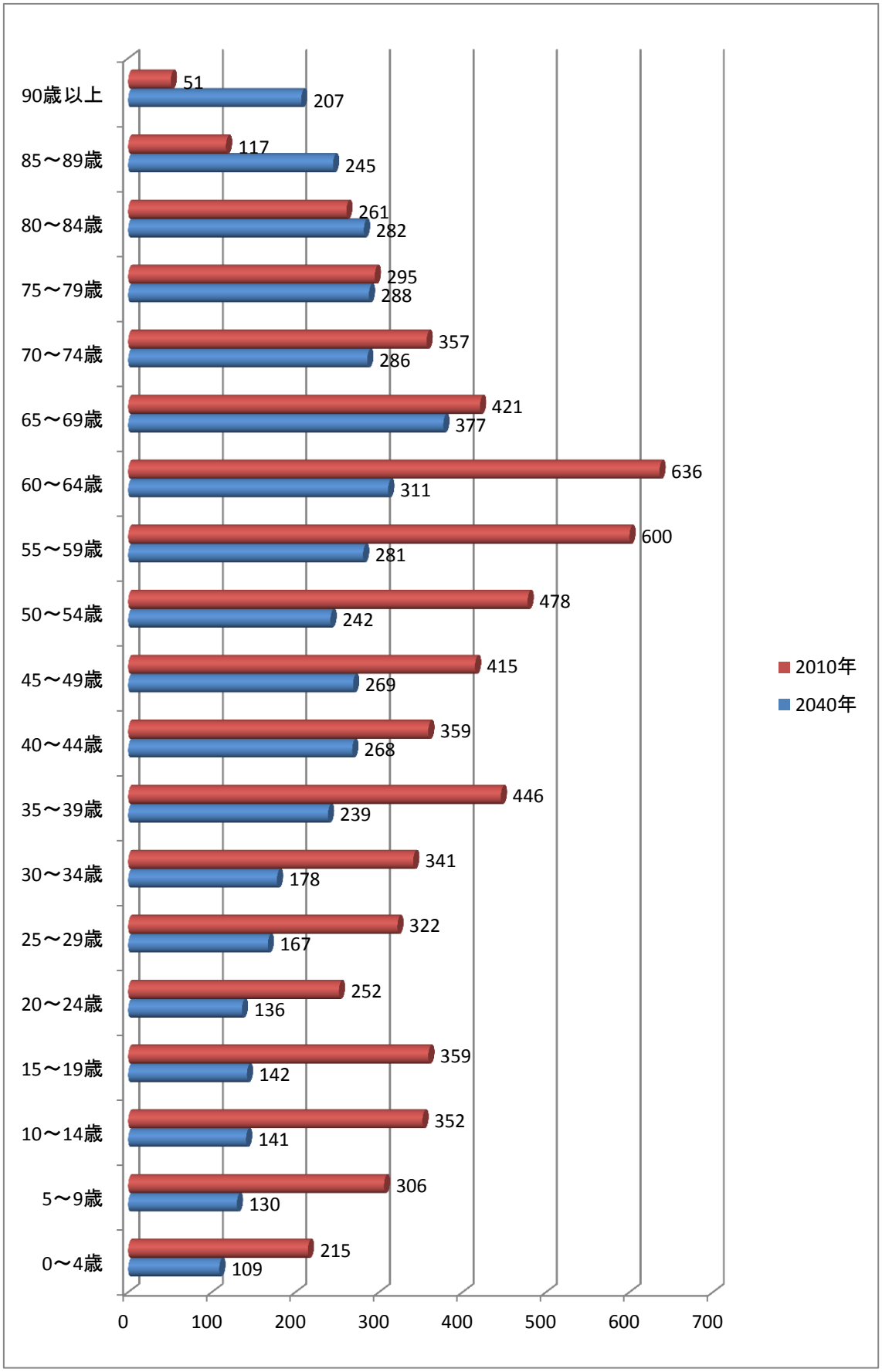
（単位：人）

	2010 年	2015 年	2020 年	2025 年	2030 年	2035 年	2040 年
男	6, 583	6, 219	5, 862	5, 485	5, 102	4, 703	4, 298
女	7, 035	6, 688	6, 349	5, 995	5, 633	5, 258	4, 849
計	13, 618	12, 907	12, 211	11, 480	10, 735	9, 961	9, 147

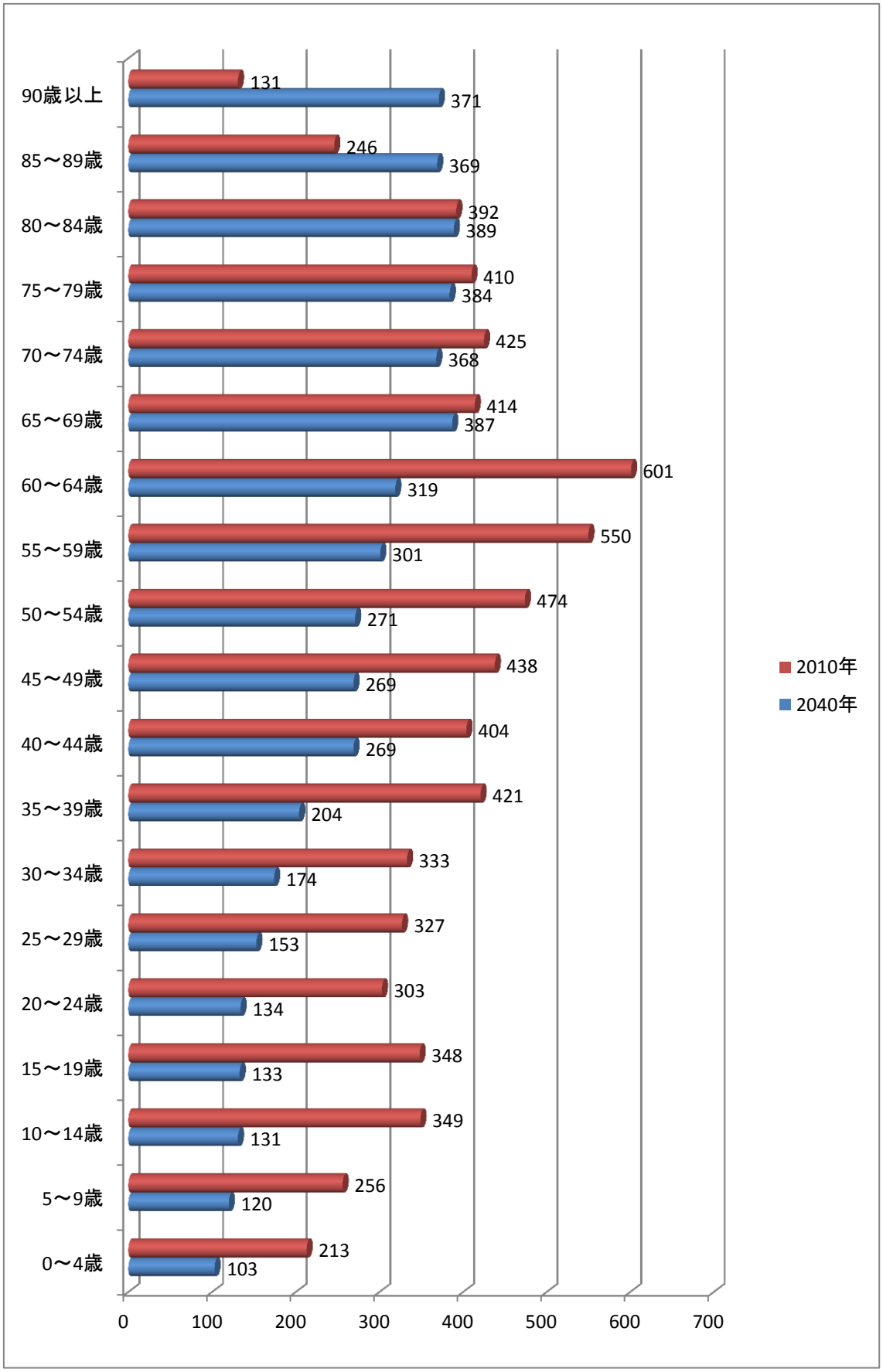
・年齢３区分別人口構成の推計



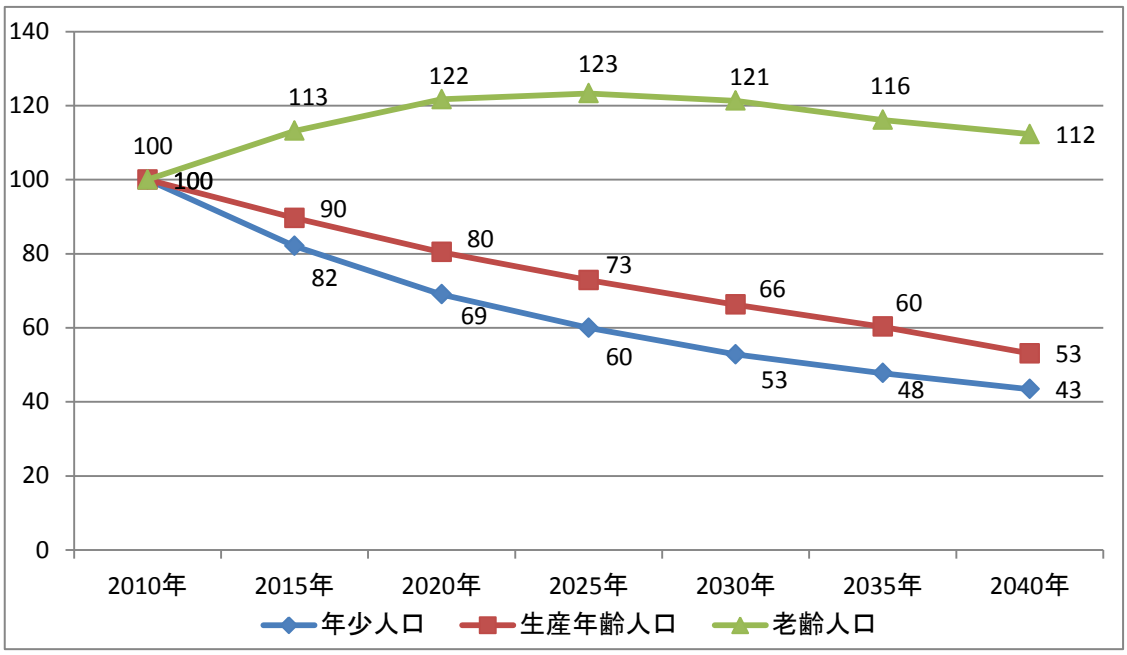
男性：年代別推計　　（単位：人）


90歳以上
85～89歳
80～84歳
75～79歳
70～74歳
65～69歳
60～64歳
55～59歳
50～54歳
45～49歳
40～44歳
35～39歳
30～34歳
25～29歳
20～24歳
15～19歳
10～14歳
5～9歳
0～4歳
51
207
117
245
261
282
295
288
357
286
421
377
636
311
600
281
478
242
415
269
359
268
446
239
341
178
322
167
252
136
359
142
352
141
306
130
215
109
0
100
200
300
400
500
600
700
2010年
2040年

女性：年代別推計　　（単位：人）


90歳以上
85～89歳
80～84歳
75～79歳
70～74歳
65～69歳
60～64歳
55～59歳
50～54歳
45～49歳
40～44歳
35～39歳
30～34歳
25～29歳
20～24歳
15～19歳
10～14歳
5～9歳
0～4歳
131
371
246
369
392
389
410
384
425
368
414
387
601
319
550
301
474
271
438
269
404
269
421
204
333
174
327
153
303
134
348
133
349
131
256
120
213
103
0
100
200
300
400
500
600
700
2010年
2040年

・年齢３区分別人口増減指数の推計（２０１０年を１００とした推計指数）



老齢人口は増加し続けますが、２０２５年をピークに減少に転じ、年少人口においては、２０４０年には約６割減少し、生産年齢人口も約５割減少すると推計されます。

（２）仮定値による将来人口の推計と分析

次の仮定値により将来人口を推計し、比較しました。

区　分 ＼ 年		2015	2020	2025	2030	2035	2040
社人研推計準拠	合計特殊出生率	1.16548	1.13996	1.11938	1.12147	1.12376	1.12404
	転入・転出の差	△710 人	△648 人	△699 人	△661 人	△670 人	△702 人
シミュレーション１	合計特殊出生率	1.16548	1.13996	1.11938	1.12147	1.12376	1.12404
	転入・転出の差	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
シミュレーション２	合計特殊出生率	1.16548	1.31223	1.23885	1.47626	1.58698	1.69770
	転入・転出の差	△710 人	△648 人	△699 人	△661 人	△670 人	△702 人
シミュレーション３	合計特殊出生率	1.16548	1.31223	1.23885	1.47626	1.58698	1.6977
	転入・転出の差	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
シミュレーション４	合計特殊出生率	1.16548	1.6000%	1.7000%	1.80000	1.90000	2.07000
	転入・転出の差	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

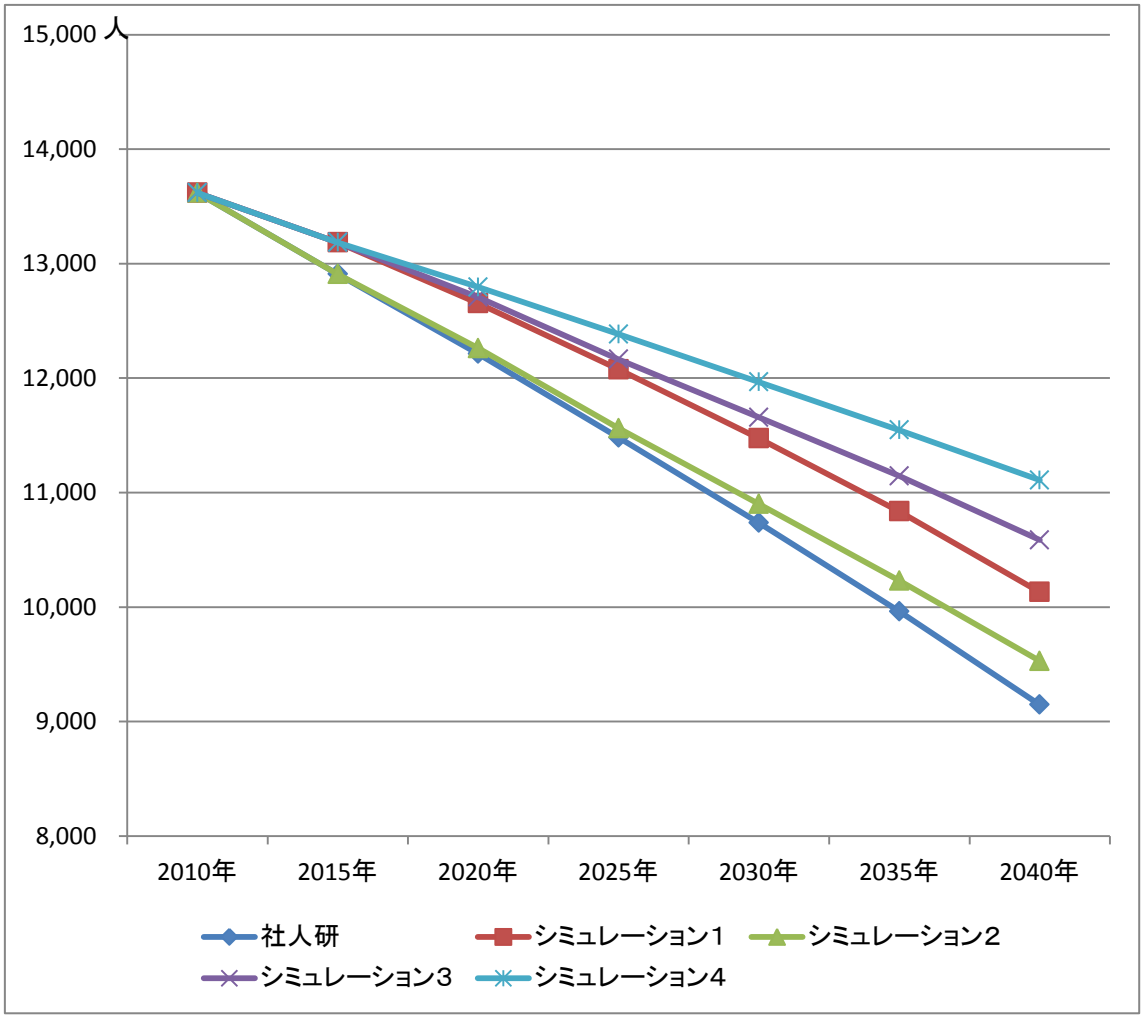
シミュレーション１	合計特殊出生率：現状により推移（社人研同様） 人口移動：収束している状況
シミュレーション２	合計特殊出生率：国長期ビジョン同等伸び率で上昇 (2040 年:1.69770) 人口移動：現状により推移（社人研同様）
シミュレーション３	合計特殊出生率：国長期ビジョン同等伸び率で上昇 (2040 年:1.69770) 人口移動：収束した状況
シミュレーション４	合計特殊出生率：国長期ビジョン同等数値(2040 年:2.07) 人口移動：収束した状況

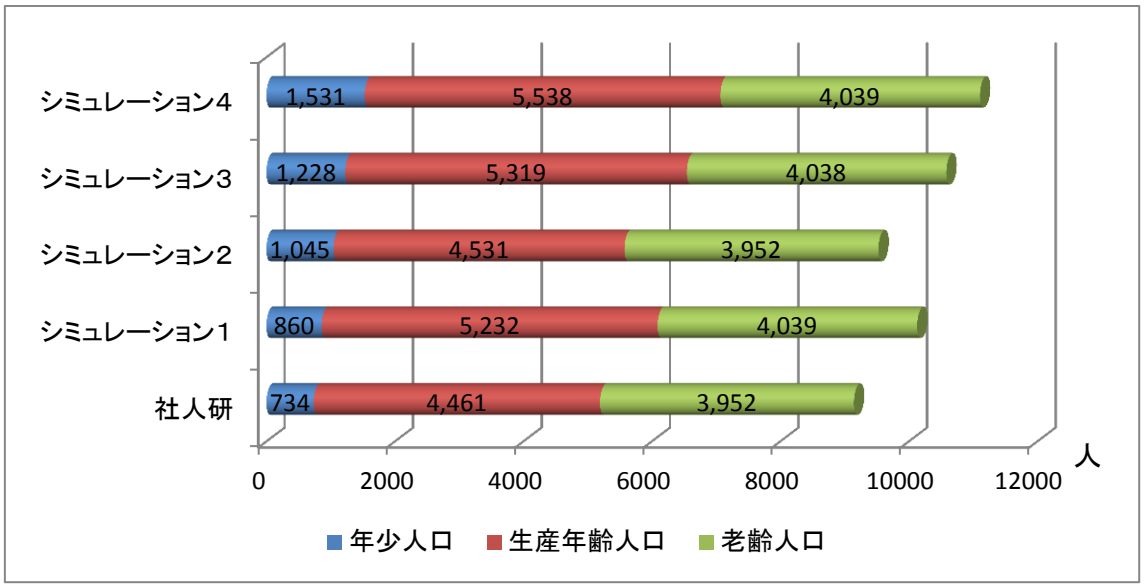
・仮定値による総人口推計　（単位：人）

	2010 年	2015 年	2020 年	2025 年	2030 年	2035 年	2040 年
社人研推計準拠	13,618	12,907	12,211	11,480	10,735	9,961	9,147
シミュレーション１	13,618	13,184	12,653	12,076	11,473	10,836	10,131
シミュレーション２	13,618	12,907	12,260	11,561	10,900	10,230	9,528
シミュレーション３	13,618	13,184	12,706	12,163	11,657	11,144	10,585
シミュレーション４	13,618	13,184	12,795	12,383	11,965	11,545	11,108

・仮定値による年齢区分別人口推計　（単位：人）

	2010 年			2040 年		
	年少人口	生産年齢人口	老齢人口	年少人口	生産年齢人口	老齢人口
社人研推計準拠	1,691	8,407	3,520	734	4,461	3,952
シミュレーション１				860	5,232	4,039
シミュレーション２				1,045	4,531	3,952
シミュレーション３				1,228	5,319	4,038
シミュレーション４				1,531	5,538	4,039





出生率の上昇は、人口増への効果は緩やかであるが長期的には波及効果が大きく、移動人口増加への改善は、早期に効果が表れます。

６．甘楽町の人口の将来展望

（１）現状と課題

自然動態では、２０００年を境に少子化による減少が顕著になり、高齢化の進展とともに死亡数は増加を続けています。

社会動態においては、ここ数年転出が転入をわずかに超える状況で若者世代の転出が目立っています。

このような現状のもと人口は１９９９年のピークから減少を続け、年齢別人口から推計すると増加をしている老齢人口も中長期には減少に転じ、町人口の減少は避けられない状況です。

人口増には、原則出生数の増加は不可欠であり、合計特殊出生率上昇対策を展開しなければなりませんが、合計特殊出生率上昇に伴う人口増加という実質的な効果を得るには半世紀近い期間が必要となります。

社会動態については、転入者数を転出者数が上回っている状況が続いていますが、その差はそれほど大きなものとはなっていない状況です。しかしながら、若者世代では進学、就職、結婚を要因とするであろう転出者数が転入者数を大きく上回っています。

少子化のみならず、こうした社会動態が町全体の高齢化を一層進めており、地域活動に支障を来たし始めています。

前述のとおり人口減少は避けられない状況ではありますが、自然動態と社会動態へ対応する施策の実施により、その度合いを緩やかなものにし、人口構造の高齢化の抑制を図ることが、地域社会に対する影響への対応を可能にするといえます。

人口減少問題に対する即効性の特効薬はありませんが、20 年、30 年後といった長期的なビジョンによる施策の推進が必要です。しかしながら、人口減少問題に対しての取組みは早いほどその効果が高まるのは確実であり、町全体として早急に施策を展開しなければなりません。

（２）目指すべき将来の方向

現在の甘楽町が誕生したのは１９５９年（昭和３４年）で、以来時代に即したまちづくりが実践されて来ました。

しかし、少子化、高齢化という国全体を覆う潮流の中、人口の減少は甘楽町においても避けられないところであり、人口減少社会への対応が迫られています。

現在町では、第５次総合計画「ＫＡＮＲＡプラン・輝きーキラッとかんら安心のまちー」により、「小さな町でも光輝き、町民が等しく安心して暮らせるまち」を基本理念としてまちづくりを進めています。

先人たちが残してくれた「自然」、「歴史」、「文化」を町の資源として甘楽町らしさを醸し出し、「この町に生まれてよかった」、「この町に住んでよかった」、そして町民の皆さんが「幸せ」を感じられるまちを目指します。

①人口減少への基本的視点

出生率向上による自然動態の改善、移住・定住による社会動態の改善を図り人口減少から脱却するための取組みにあたって、甘楽町の目指すべき将来の基本的方向を次のとおりとします。

○若い世代の希望の実現

若い世代の就労の場の提供、結婚、出産、子育てへの支援などの社会的環境を実現する。

○移住・定住への希望の実現

人口流出抑制のため、甘楽町に「住みたい」「住み続けたい」人の希望を叶えるとともに、「住みたくなる」「住み続けたくなる」環境を実現する。

○安心して暮らせる環境の実現

各地域の特徴を活かし、人口減少、高齢化による変化に柔軟に対応し、安全で安心できる環境を実現する。

②人口の将来展望

人口減少に対する施策を展開することにより、合計特殊出生率の上昇、移住・定住施策による社会動態における人口減が解消され、人口減少が緩やかになると見込み、2040 年（平成 52 年）の人口１０，５００人を確保し、人口減による地域への影響を最小限に留める展望とします。

人口の将来（２０４０年）展望	**１０，５００人**

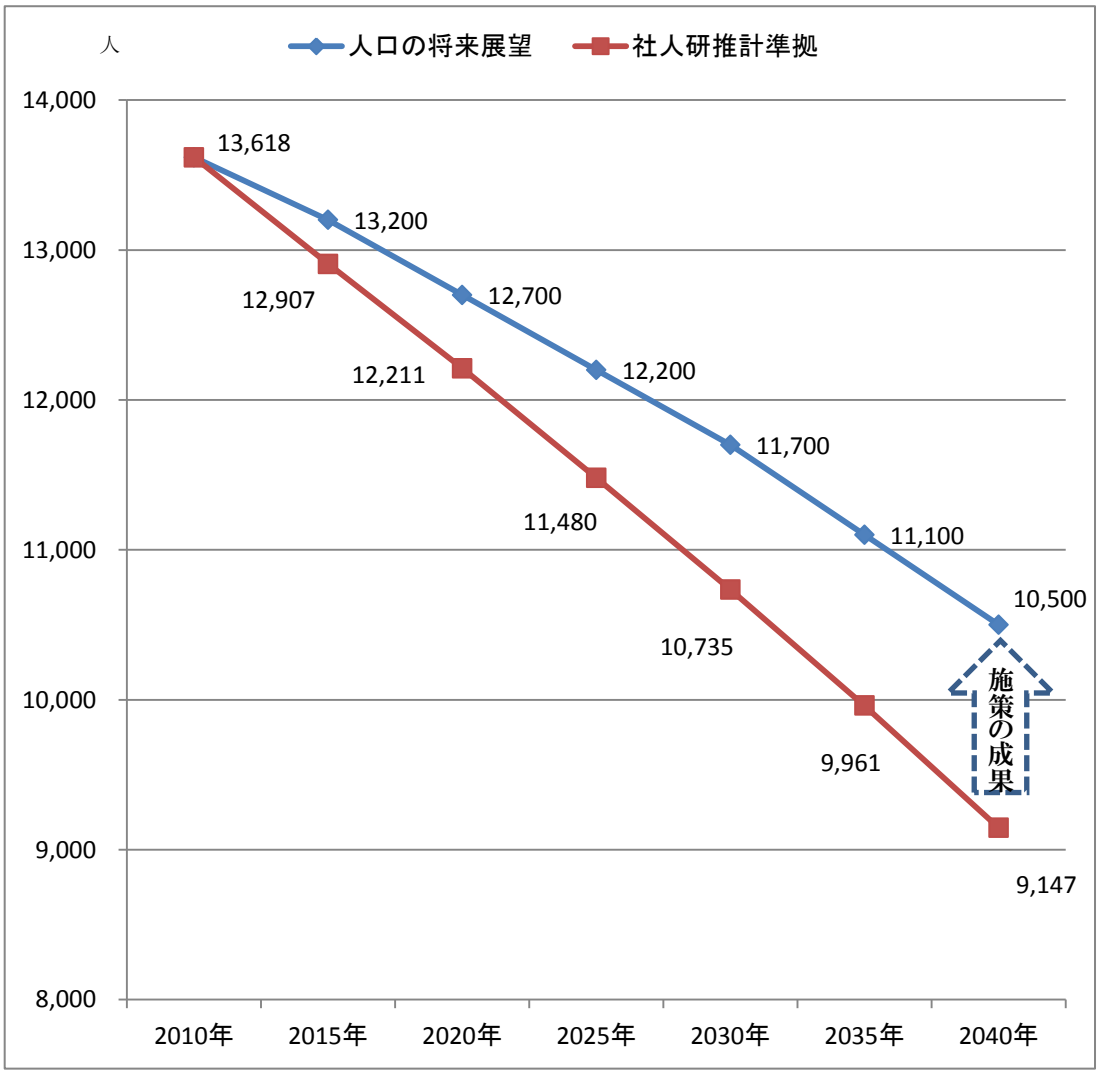
（参考）

社人研推計準拠人口（２０４０年）	９，１４７人

仮定値による将来人口の推計と分析におけるシミュレーション３に準じ、次のとおり各年ごとの人口を将来展望としての目途とします。

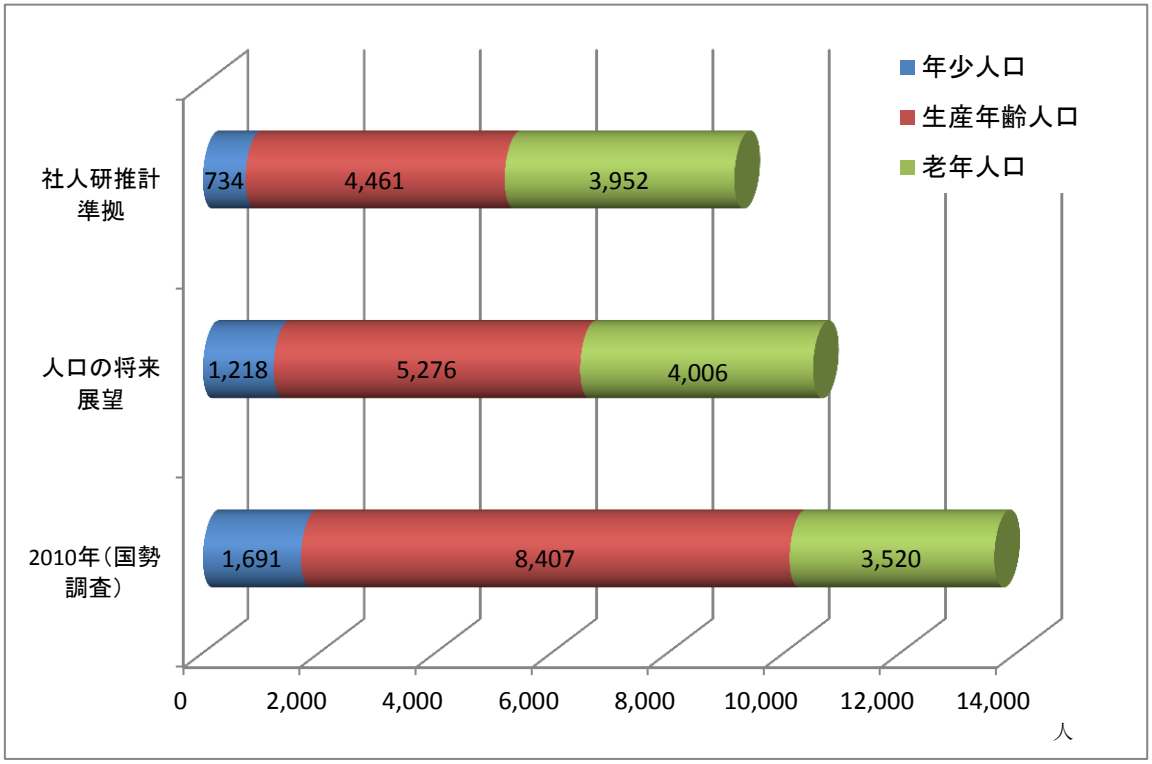
・人口の推移（将来展望）

	2010 年	2015 年	2020 年	2025 年	2030 年	2035 年	2040 年
人口の将来展望（目途）	13, 618 人	13, 200 人	12, 700 人	12, 200 人	11, 700 人	11, 100 人	10, 500 人
社人研推計準拠	13, 618 人	12, 907 人	12, 211 人	11, 480 人	10, 735 人	9, 961 人	9, 147 人



・年齢区分別人口（将来展望）

	年少人口 （０～14 歳）	生産年齢人口 （15～64 歳）	老年人口 （65 歳以上）
人口の将来展望 （2040 年）	**1,218 人 （11.6 %）**	**5,276 人 （50.2 %）**	**4,006 人 （38.2 %）**
社人研推計準拠 （2040 年）	734 人 （8.0 %）	4,461 人 （48.8 %）	3,952 人 （43.2 %）
2010 年 （国勢調査）	1,691 人 （12.4 %）	8,407 人 （61.7 %）	3,520 人 （25.9 %）



この人口の将来展望を実現するための合計特殊出生率、人口の社会増減の目途を次のとおりとします。

○国の長期ビジョンにおける合計特殊出生率の上昇率に準じ、2040 年における合計特殊出生率 1.70 を目途とします。

	2015 年	2020 年	2025 年	2030 年	2035 年	2040 年
合計特殊出生率 将来展望	1.17	1.31	1.24	1.47	1.59	1.70

この合計特殊出生率の上昇が及ぼす 2040 年における人口への影響は、約 380 人の増加が見込まれます。さらに長期的な人口への影響は大きなものとなり、合計特殊出生率の上昇を図る取り組みが必要となります。

○社会増減においては、現状の転出過多を解消することを目途とします。

現在の転出入人数の差がないものとして 2040 年における人口を推計すると約 980 人の増加が見込まれます。（各年代層ごとに転出入人数の差がなくなると仮定）

人口減少の早期抑制には、甘楽町への転入増加、転出減少、即ち甘楽町への定住・移住対策が必要となります。

（３）人口の将来展望実現に向け

人口の減少は、経済活動や社会保障における負の影響のみならず、地域や集落として成り立つために必要な活力を減少させていきます。

人口減少社会が進行中の今、この人口の将来展望を実現させるため、別に定める「甘楽町まち・ひと・しごと創生総合戦略」による各施策を推進することにより、甘楽町の魅力に磨きをかけ、長期的に安定した人口の実現を目指していきます。

単なる人口の奪い合いではない、真に甘楽町に住んでみたい、住み続けたいと感じられ、「小さな町でも光輝き、町民が等しく安心して暮らせるまち」を実感できるまちづくりを進めます。